

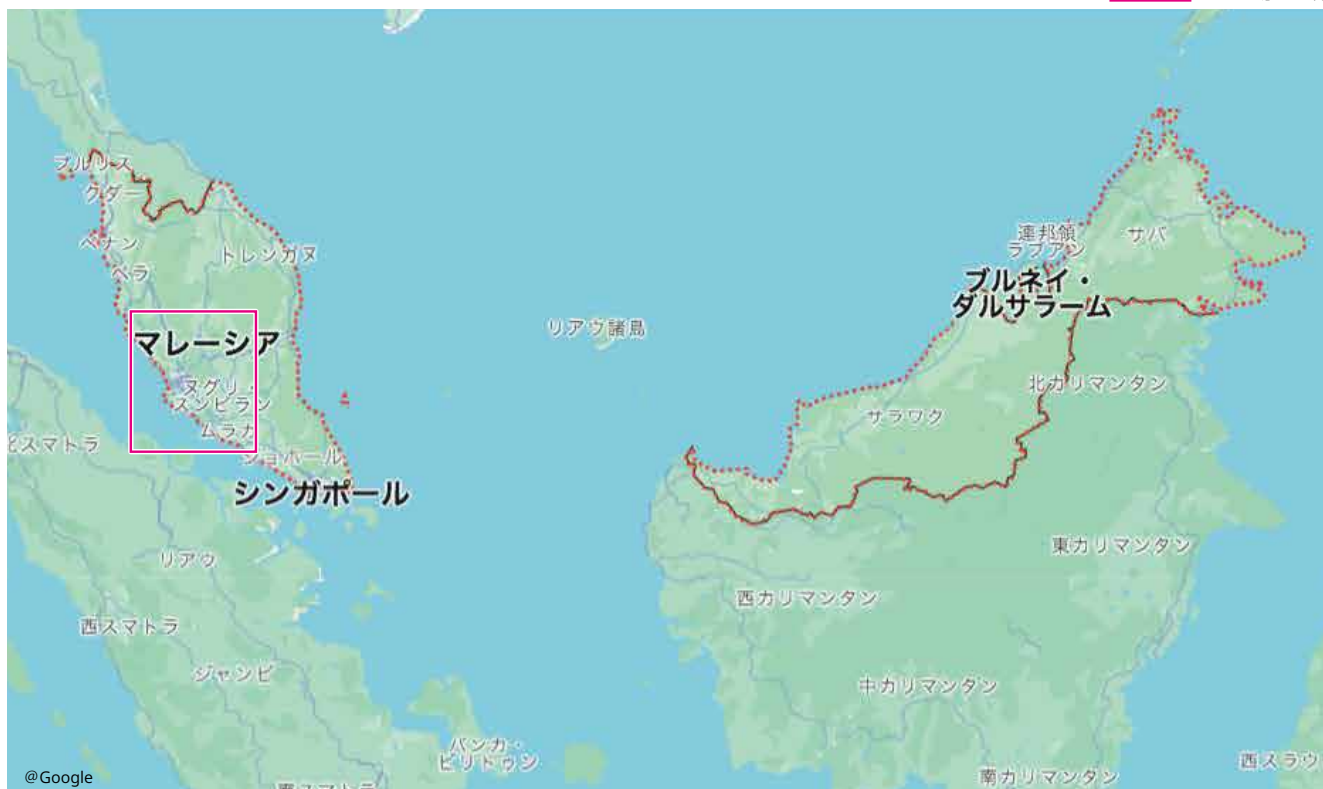
04 現地行程

日程	内容
12月8日(月)	成田空港発 ✈ クアラルンプール国際空港着
12月9日(火)	■東方政策元留学生同窓会(ALEPS)の講演 ■クアラルンプール市内視察 (ペトロナス・ツインタワー、新王宮、国家記念碑、国立モスク、独立広場) ■バスでマラッカへ移動  
12月10日(水)	■マラッカ市内視察 (青雲亭、カンボン・クリン・モスク、オランダ広場、セントポールスの丘、サンチャゴ砦) ■バスでシンガポールへ移動  

日程	内容
12月11日(木)	■JETROシンガポール事務所訪問 ■シンガポール・シティ・ギャラリー見学 ■ホーカーセンターで昼食 ■アジア大洋州住友商事会社訪問 ■シンガポール国立博物館見学 ■プラナカン博物館見学 ■リトルインディア見学   
12月12日(金)	■ブンゴル・デジタル地区視察 ■シンガポール国立大学(日本研究会)との交流 ■ガーデンズ・バイ・ザ・ベイ見学 ■振り返りの会  
12月13日(土)	■マリーナ・バレージ見学 ■アラブストリート見学 ■チャイナタウン見学 ■マーライオン公園見学  
12月14日(日)	チャンギ国際空港発 ✈️ クアラルンプール国際空港 ✈️ 成田空港着

04 マレーシアの基礎情報

…活動地域



・国旗：



- ・面積：約33万平方キロメートル(日本の約0.9倍)
- ・人口：約3,350万人(2023年マレーシア統計局)
- ・民族：マレー系約70%(先住民12%を含む)、中華系約23%、インド系約7%(2023年マレーシア統計局)
- ・言語：マレー語(国語)、中国語、タミール語、英語
- ・宗教：イスラム教(連邦の宗教)64%、仏教19%、キリスト教9%、ヒンドゥー教6%、その他2%(2023年マレーシア統計局)

・略史：

年	略史
15世紀初め	マラッカ王国成立
16世紀～17世紀	ポルトガル、オランダ東インド会社によるマラッカ支配
1824年	英蘭協約によりマレー半島及びボルネオ島西北部が英国の勢力範囲下となる。イギリスによる植民地支配
1942年～1945年	日本軍による占領
1948年	英領マラヤ連邦形成
1957年	マラヤ連邦独立
1963年	マレーシア成立(シンガポール、英領北ボルネオ(サバ)及びサラワクとマラヤ連邦が統合)
1965年	シンガポールが分離、独立

外務省WEBサイト「マレーシア基礎データ」より引用

(<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/malaysia/data.html>)

04 マレーシアの活動地域



①新王宮

国王の公邸で、5年交代で選出される王の邸宅。

②国家記念碑

マラヤ危機など国のために命を捧げた兵士の弔いのため建造された。高さ15mのブロンズ像。

③国立モスク

約15,000人を収容する国内最大規模のモスクで、高さ72mのミナレットと星形の青いドームが特徴の現代イスラム建築。

④独立広場

1957年8月31日にここで独立が宣言された。国旗がはためく高さ約100mの掲揚塔は世界一の高さを誇る。毎年独立記念日は華やかな祭典が行われる。

⑤ペトロナス・ツインタワー

地上88階建て、高さ452mという世界No.1のツインタワー。

⑥青雲亭

1646年、明の鄭和のマラッカ寄港を讃えて建立。仏教、儒教、道教の神がともに祀られた珍しい中国寺院。

⑦カンボン・クリン・モスク

1748年にインド系のイスラム教徒によって建立。パゴダ風のミナレット、プラナカンスタイル、シャンデリアなど文化の融合が見られる。

⑧オランダ広場

マラッカを象徴する場所。17～18世紀にかけての歴史的建物が美しく保存されている観光の中心地。マラッカキリスト教会、スタダイスなどがある。

⑨セントポールの丘

オランダ広場から階段で上ったところにある、マラッカ海峡が見渡せる丘。セントポール教会跡やサンチャゴ砦などがある。

⑩サンチャゴ砦

1511年にポルトガルが最初に築いた砦。内側には病院や学校、刑務所が建てられたが、19世紀初期にイギリスによって破壊され、門だけが残っている。

04 シンガポールの基礎情報

…活動地域



- ・ 国旗： 
- ・ 面積：約720平方キロメートル(東京23区よりやや大きい)
- ・ 人口：約604万人(うちシンガポール人・永住者は418万人)(2024年)
- ・ 民族：中華系74%、マレー系13.5%、インド系9%(2024年)
- ・ 言語：国語はマレー語。公用語として英語、中国語、マレー語、タミール語
- ・ 宗教：仏教、キリスト教、イスラム教、道教、ヒンズー教

・ 略史：

年	略史
1400年頃	現在のシンガポール領域にマラッカ王国建国
1511年	マラッカがポルトガルに占領され、マラッカ王国が滅亡 マラッカ王国の王はマレー半島のジョホールに移り、ジョホール王国を建国 それに伴い、ジョホール王国によって現在のシンガポール領域が支配される。
1819年	英国人トーマス・ラッフルズが上陸 ジョホール王国より許可を受け商館建設
1824年	正式に英国の植民地となる。
1832年	英国の海峡植民地の首都に定められる。
(1942年～1945年)	(日本軍による占領)
1959年	英国より自治権を獲得、シンガポール自治州となる。
1963年	マレーシア成立に伴い、その一州として参加
1965年	マレーシアより分離、シンガポール共和国として独立

外務省WEBサイト「シンガポール基礎データ」より引用

(<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/singapore/data.html>)

04

シンガポールの活動地域



① シンガポール・シティ・ギャラリー

シンガポールのURAセンターにある3階建てのビジターセンターで、シンガポールの都市変革と将来の計画を展示している。

② シンガポール国立博物館

民族・文化、自然、アートなどの展示もある歴史系の総合博物館で、1887年に開館したシンガポール最古の博物館。

③ プラナカン博物館

プラナカン文化に特化した、シンガポールの博物館。「プラナカン」とは、15世紀後半から数世紀に渡りマレーシアやシンガポールに移ってきた中華系移民の子孫のこと。

④ プンゴル・デジタル地区

シンガポール初のスマートビジネス地区として、住宅・大学・企業が集積した地域であり、都市政策やまちづくりなどの新たな取り組みを検証・実験できる。

⑤ ガーデンス・バイ・ザ・ベイ

シンガポールの都市計画「シティ・イン・ア・ガーデン」の取組みの1つ。最新技術を駆使した未来型植物園。

⑥ マリーナ・バラージ

貯水や洪水制御の機能のほか、ウォータースポーツなどの施設としても活用されているダム施設。また、国の環境への取組みが、最新のデジタル技術やアートを使って展示される「サステナブル・シンガポール・ギャラリー」もある。

⑦ チャイナタウン・⑧ リトルインディア・

⑨ アラブストリート

中心部にある民族文化地区。イギリスの分割統治時代に民族ごとに居住地を定めていた名残で定着したと言われている。

⑩ マリーナベイ・サンズ

シンガポールを代表する高級リゾート。世界最大の屋上インフィニティプールが有名。

⑪ マーライオン公園

シンガポールのランドマークであり、シンガポールのダウンタウンコア地区の中央ビジネス地区に近い主要な観光名所。

国際交流体験ツアーを通じて学んだこと

伊藤 萬結



1. はじめに

本レポートは、マレーシア・シンガポール国際交流体験ツアーに参加した経験をもとに、その学びや気づきを振り返るものである。今回の派遣には、15歳から29歳までの幅広い年齢層の12名が隊員として参加し、学生や社会人など、それぞれ異なる立場や背景を持っていた。そのため、参加前は、価値観や考え方の違いから、円滑なコミュニケーションが取れるのか不安を感じていた。しかし、実際に活動を共にする中で、一人ひとりが異なる視点から意見を出し合い、自分にはなかった考え方に触れることができた。特に、年下や同年代の隊員から学ぶことも多く、年齢や立場に関係なく、互いに影響を与え合える関係性が築けたと実感している。この国際交流体験を通して、学校の授業や日常生活だけでは得ることのできない学びを得るとともに、課題に対して一つの見方にとらわれず、多角的・多面的に捉える力を養うことができた。

2. 事前学習—マレーシア・シンガポールの歴史—

19世紀以降、シンガポールとマレーシアはイギリスの植民地支配下に置かれ、東南アジアにおける重要な貿易拠点として発展してきた。1819年にイギリスがシンガポールを開港し、ペナンやマラッカとともに海峡植民地として統治を開始すると、多くの移民が流入し、多民族社会が形成された。イギリスによる植民地支配では「分割統治」が行われ、民族間の分断を生み出す要因ともなった。

第二次世界大戦中の1941年、日本軍はマレー半島に上陸し、1942年にはシンガポールを占領した。「東のジブラルタル」と称された要塞が短期間で陥落したことで、イギリスへの信頼は大きく揺らいだ。日本軍政下では、日本語教育や宮城遥拝の強要、華僑・華人への厳しい弾圧が行われ、住民に深い傷を残した。しかしこの経験は、戦後の独立運動を促進し、両地域が自らの国家を形成していく重要な契機ともなった。

3. 東方政策元留学生同窓会

東方政策元留学生同窓会 (ALEPS) のIsrami Bin Ismailさんか



からお話を伺い、国際理解について深く考える機会となった。国際理解のために海外に行く理由として、固定概念や誤解を乗り越えることの重要性を挙げられていた点が特に印象に残っている。その中で、「日本人は普段あまり握手をしないにもかかわらず、温泉などで裸の付き合いを大切にする文化がある」という例を示され、文化の違いは外から見て初めて気づくものだと感じた。また、文化によって敬意の表し方や価値観は大きく異なるという話も心に残った。日本では時間に非常に厳しく、1分の遅れでも遅刻とみなされがちであるが、こうした感覚も世界共通ではない。Isramiさんの話を聞き、2、3分の遅れをおおらかに受け止める姿勢が、日本にももっとあってよいのではないかと私は感じた。今回のお話を通して、国際理解とは他国の文化を知るだけでなく、自分たちの常識を見直すことから始まるのだと学んだ。

4. 国家記念碑

マレーシアの国家記念碑は、第二次世界大戦や非常事態宣言期などで命を落とした人々を追悼するために建てられた慰霊碑であり、独立国家としての歴史と犠牲を象徴する存在である。今回、マレーシアに到着した初日にこの国家記念碑を訪問したことで、この国にとって歴史の記憶や犠牲者への敬意がいかに重要視されているかを強く感じた。また、高市総理がマレーシア訪問時に同じ場所で献花を行ったことからこの記念碑は記憶に新しく、外交の場においても象徴的な意味を持つ場所だと実感した。実際に記念碑を見ると、複数の兵士像が力強く前進する姿で表現されており、国家のために戦った人々の勇気や団結が強調されている一方で、その背後にある犠牲や悲しみも感じ取ることができた。また、この国家記念碑は単なる観光名所ではなく、市民が歴史を学び、国の成り立ちを共有する場として機能している点も印象的であった。過去の出来事を記念碑という形で可視化し、人々が集い記憶を継承していく姿から、歴史を忘れず次世代へ伝えようとするマレーシアの姿勢が強く感じられた。

5. シンガポール国立大学・日本研究会との交流

シンガポール国立大学日本研究会との交流を通して、他国の同じ年代の学生と直接意見を交わすことができたことは、非常に新鮮で貴重な経験であった。交流の中では、それぞれの国が抱える社会問題について話し合い、特に心に残ったのはシンガポールにおける学力社会の深刻さである。シンガポールでは就職の際にも成績が大きく影響し、シンガポール版マイナンバーカードによって小学校からの成績がすべて確認できる仕組みがあると聞いた。そのため、成績に対するプレッシャーが強く、精神的な負担を感じる学生が多い現状があると聞いた。政府も、そうした学生と医師などの専門家をつなぐ支援ネットワークを構築しようとしているが、医師不足という課題

から十分に機能していないという点も課題として挙げられていた。この話を聞き、日本でも学力競争による子どもや家庭への負担が問題視されていることを思い出し、両国に共通する課題であると感じた。今後、シンガポールがこの問題をどのように乗り越えていくのかに強い関心を持った。一方で、日本の課題として年功序列社会が話題に上がり、新入社員や若手が意見を言いにくい文化について、シンガポールの学生から「不思議だ」と言われたことが印象的であった。

「上司に言いづらいなら、優しく言えばいいのでは」という率直な意見は、自分にとって新たな視点となった。この交流を通して、私自身もより積極的に意見を発信できるようになりたいと感じるとともに、誰もが安心して発言できる雰囲気をつくれる存在でありたいと強く思った。

6. 多文化共生について

今回の交流を通して、多文化共生とは、異なる文化を知識として理解することにとどまらず、自分の文化と比較しながら相手を理解しようとする姿勢を持ち続けることだと感じた。実際に他国の学生と話す中で、自分にとって当たり前だと思っていた価値観や考え方が、必ずしも普遍的なものではないことに気づかされた。これからの人生の中で、異なる文化や価値観に触れた際、時には自分にとって受け入れがたいと感じる考え方や行動に出会うこともあるかもしれない。しかし、そのような場面に直面したときこそ、違いを否定するのではなく、「なぜそう考えるのか」「どのような背景があるのか」を理解しようとする姿勢が重要であると、今回の交流を通して実感した。相手を理解しようと努めることは、自分自身の価値観を問い直すことにもつながり、視野を広げるきっかけとなる。多文化共生とは、意見や価値観の違いをなくすことではなく、違いがあることを前提に対話を重ね、互いを尊重しながら共に生きていくための姿勢であると学んだ。



7. おわりに

今回の交流や学びを通して、異なる価値観や文化に触れることは、不安や戸惑いを伴う一方で、自分自身を成長させる大きな機会であると感じた。これからの人生では、受け入れがたいと感じる出来事や、自分の考えが通用しない場面に直面することもあるかもしれない。しかし、そうした違いを恐れて避けるのではなく、理解しようとする姿勢を大切にしながら、さまざまなことに積極的にチャレンジしていきたい。多文化共生の学びを生かし、未知の環境や新たな出会いにも前向きに向き合い、自分の視野を広げていきたい。



クアラルンプールにある国家記念碑 (Tugu Negara)

多文化「共生」とは

海老田 ふう



1. 多文化が混じり合うマレーシア

1.1 機内にて

2025年12月8日、マレーシアへ向かう機内の中で、『Keikhlasan Cinta』(2023)という映画を鑑賞した。テレビ司会者のラニアという女性が、イスラム教のラマダンについて説明する番組制作に奮闘する中で、イスラム教という自身のルーツについて見つめなおす物語である。

映画の中で驚いたのは、主人公と友人との会話において、英語、マレー語、中国語が、文の中で自然に混在していることだった。最初に英語を話していたかと思えば、次の文ではマレー語、さらには中国語の単語が挿入される。日本語では、固有名詞の中に外来語は用いられることがあっても、3つの言語が会話の一場面において複合的に使用されることは少ない。そのため、この言語使用のあり方は非常に新鮮に感じられると同時に、マレーシアの文化の多様性も感じられた。

1.2 イスラミさんのお話を聞いて

マレーシアに降り立って2日目、ALEPS（東方政策元留学生同窓会）のイスラミさんから、マレーシアにおける歴史や言語、食事、多文化共生についてのお話を伺った。その中で、マレーシアの言語の多様性についてもお話を伺った。マレーシアは、マレー系約70%（先住民12%を含む）、中華系約23%、インド系約7%の多民族国家である（2023年マレーシア統計局）。そのため、マレー語を国語としつつも、ビジネスでは英語が使われ、日常では様々な方言が飛び交うようだ。驚くべきことに、マレーシアのニュース番組では方言が話される場合も、字幕は出ないようだ。その理由についてイスラミさんは、マレーシアの人々は、相手の伝えたいことを推察する能力が高い人が多いからではないかと語っていた。

またイスラミさんは、マレーシアにおけるハラール認証（ムスリムの人が食べられるように適切な処置がしてある食品だと示すもの）の申請手続きの支援や、日系企業がマレーシアに進出する際のサポートにも携わっている。そのため、日本の学校現場やホテルにおけるハラール提供の対応についてのお話もお聞きすることができた。そして、食文化の話題を通じて、多文化共生に対する意識の違いが見えてきた。



飲料水のハラール認証マーク



セント・ポール教会



チェンフンテン寺院 (青雲亭)



HDB (プンゴル地区)

日本では、既存のシステムを大きく変革した上で、完璧な形での「多文化共生」を実現しようとする傾向があると感じる。例えば日本のホテルの人が、ムスリムの方に合わせた食事を提供するために、キッチン改造してハラール専用の調理台などを作るべきという極端な姿勢の場合が多い。しかし、ビジネスコストを考えた上で、ムスリムの方が実際に求めているのは、「必要なときに冷凍のハラール食品を提供する」といった臨機応変な対応であるという指摘がなされた。

1.3 多文化「共生」とは何か

イスラミさんのお話を聞いて、日本の完璧主義は良い面もあるが、多様な文化を受け入れる際の弊害にもなりかねないというように感じた。多文化共生とは、自国の文化や慣習を大きく改変して他文化に合わせるのではなく、自国文化を尊重しつつ、他文化に対して柔軟に対応し、その折衷点を模索していく姿勢なのではないかと考えるようになった。

その後、マラッカでは、ポルトガル、オランダ、イギリスによる統治を経て、教会から要塞へと姿を変えたセント・ポール教会や、ヒンドゥー教寺院、モスク、仏教寺院が隣接するハーモニーストリートを見学した。以上の経験を通じ、マレーシアでは多様な文化や宗教が交差する中で、自国文化も異文化も尊重する柔軟性が育まれてきたのではないかと感じた。

2. 民族が集まるシンガポール

2.1 シンガポールの多文化共生

シンガポールでは、チャイナタウン・リトルインディア・アラブストリートなどの街並みを巡った。街を巡ると、地区ごとにまるで違う国を訪れているような感覚に陥った。チャイナタウンには赤い多層構造の仏教寺院が聳え立ち、リトルインディアには独特の香の匂いが漂い、アラブストリートにはモスクの通りを中心にトルコ料理店が並び、各民族のアイデンティティが明確に区別されているのがシンガポールの特徴であると肌で感じた。

また、ITの最先端地区であるプンゴル地区を視察した際、現地で永住権を取得した日本人の方が、国民の約8割が入居するHDB（住宅開発庁が供給する公営住宅）での民族ごとの住宅の配分比についてもお話くださった。シンガポール国内の民族比を考慮して、HDBに入居できる民族比率も制限されているそうだ。シンガポールは19世紀初頭のイギリス植民地時代に、民族ごとの居住区が定められた。現代においても、各民族の文化が反映された区画や、HDB住宅の入居条件など、政府による民族に対する制限が強いように感じられた。

2.2 多様な食が集まるホーカーセンター

シンガポールでの多様な民族文化が一箇所に集まるのが、屋内屋台街・ホーカーセンターだ。チキンライス（海南鶏飯：鶏の出汁が効いたご飯に、蒸したり皮を焼いたりした鶏肉をのせたもの）やシンガポールラクサ（魚介とココナッツベースのスパイシーな麺料理）などが食べられる。ムスリムのハラール専用のトレイ・お皿の返却台もあるのも、宗教的配慮が日常の中に溶け込んでいると感じた。

シンガポールは、マレーシアのように多文化が隣接し混じり合うというよりも、それぞれが独自の文化を保ちつつ共存しているように感じた。



左手側：チキンライス 右手側：ラクサ

3. 派遣を経て

日本では、特に千代田区周辺地域では新宿区の高田馬場や新大久保など、自然発生的に民族ごとの街が形成されてきた点から、マレーシアでの多文化共生の形に近いように感じる。一方で、区外出身の自分自身のこれまでの教育について振り返った際に、学校教育においては教科書の中でしか異文化について扱ってこなかったように感じる。大学に入學してはじめて、海外の留学生と密接に交流するようになってから、相手国の文化を正しく理解したいと感じるようになった。

シンガポール国立大学の学生との交流で、シンガポールでは多文化共生が進んでいるが、日本は今後どうしたらよいかと尋ねたことがあった。その時現地の学生が、「シンガポールで多文化共生が進んでいるのは、幼い頃から海外の人が隣にいたことが普遍的（当たり前）だからだ」という言葉をかけられたことが強く記憶に残っている。

この経験から、千代田区においても、子どもたちが日常的に海外にルーツを持つ人々や子どもたちと出会い、多文化に触れられる機会を創出することが不可欠だと考えた。これまで千代田区庁舎で行われてきた大使館連携イベントを一歩進め、学校教育や地域の公共施設との恒常的な連携が必要ではないかと考える。一部の生徒を対象とした海外派遣だけでなく、地域全体を巻き込み、日常的に近隣に住む多様なルーツを持つ人々と交流する仕組みを整えるべきであると感じた。

近年、日本社会では異質性への恐怖からか、海外をルーツとする人に対する排他的な言動が見受けられることもある。まずは「自分とは異なる相手の存在」を当たり前の日常として受け入れられるよう、教育機関、図書館、美術館などの公共施設が一体となり、幼少期から多文化に触れる企画を展開していくべきだと考える。



チャイナタウン



リトルインディア



アラブストリート

参考

- ・外務省「マレーシア基礎データ」 <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/malaysia/data.html> 2026年1月18日アクセス
- ・千代田区「国際交流フェア」 <https://www.city.chiyoda.lg.jp/koho/bunka/bunka/kokusaikoryu/heiwakoryu.html> 2026年1月19日アクセス

多文化共生を支える社会の仕組み

大川 果音



1. はじめに

私は、過去に海外に滞在した際、多くの現地の方から温かいサポートをいただき、充実した生活を送ることができたことにとても強く感謝の気持ちが残っている。この経験を経て、今度は私が日本に来る海外の方々に対し還元できるよう、同じように安心して過ごせる環境づくりに関わりたいと考えるようになった。そのため、今回は特に多文化共生の視点に関心を持ち、このプログラムへの参加を志望した。シンガポールとマレーシアの二カ国に実際に現地に行くことで、様々な国籍・文化・年齢の人が共に過ごす社会像をより具体的に理解し自分が住む街やこれからの活動に生かしたいと思った。

ここからは、現地で学んだ多文化共生に対する取り組みや新たに知った社会の仕組みを踏まえて自分が住む街に還元していくために考察する。

2. マレーシアにおける多文化共生の実態

マレーシアについて学んだ中で、はじめに伝えたいのは東方政策元留学生同窓会（ALEPS）の方からのお話である。現地訪問を始める前にマレーシアについて紹介していただいたのだが、その中でマレーシアの国民は「自分の価値観だけで人と共に生きていくのは難しい」という共通認識があることを知った。互いの価値観を尊重して、自分の意見と折り合いをつける柔軟性を持ち、マレーシア国外に対してもオープンな姿勢である人が多いことが多文化共生という特徴の確立につながっているように感じた。多文化共生において、特に課題となるのは食事や服装などの宗教上のルールに対応していくことだと考える。マレーシアにはハラール認証と呼ばれ、イスラム教の教えに基づき、安全で許可された方法で提供されている商品やサービスであることを示す制度がある。この制度により、イスラム教徒は安心して商品やサービスを利用でき、同時に非イスラム教徒も宗教的配慮を理解しやすくなる環境を実現できているのだと感じた。この仕組みを知り、日本に置き換えて考えたときに宗教や文化的マイノリティの要望にも向き合い可能にすることで、共生の輪を広げることにつながるのだろうと感じた。



ハーモニーストリート 訪問時写真

マレーシアの現地研修の際に印象的であった訪問先はマラッカ地区である。マラッカにあるハーモニーストリートは、イスラム教のモスク、ヒンドゥー教の寺院、仏教や道教の寺院が一本の通りに隣接して建ち並び、非常に象徴的な場所である。この通りを訪れたことで、異なる複数の文化に属する人々が隣り合い生きていることを、実態をもって理解することができた。実際に現地を歩くと、異なる宗教施設が近距離に存在しているにもかかわらず、互いに対立する様子はなく、人々は日常生活の中で多様な宗教や文化を当たり前のものとして受け入れているように見え、それぞれの信仰や文化が自然に尊重されていることが感じられた。

背景として、マレー系・中華系・インド系といった多民族国家としての長い歴史があり、それを踏まえて異なる文化や価値観と共に生きることが社会の基盤となっていることに感動したが、それと同時に簡単に構築できる環境ではないと感じた。



Punggol Digital District 訪問時写真



HDBマンション

3. シンガポールにおけるスマートシティ政策

シンガポールでは、文化や習慣という視点にとどまらず共生という側面から見た、社会の仕組みの発展を学ぶことができた。中でも、特に関心を持ったのはPunggol (プングル) 地区である。Punggol地区は、シンガポール北東部に位置する新興住宅地で、スマートシティ構想を象徴するモデル地区の一つである。政府主導の都市開発により、住宅、交通、教育、商業施設が計画的に整備されている。特に、データ活用を前提とした都市設計が進められており、住民の生活の質向上と持続可能な社会の実現に向けて新しい取り組みを行っていた。以下二つの例を紹介する。

①住宅

HDBとは、シンガポール政府が“すべてのシンガポール人が、必ず住宅を持つ”ことを掲げ、施された制度のひとつである。政府管轄の集合住宅「HDBマンション」は購入する際に、所得、年齢、婚姻の有無などによって様々なルールがある。特に印象的だったのは「単身で購入する場合は35歳以上」というルールである。これは結婚や子育てを促進する目的がある。また、実家から2キロ圏内に住むと補助金が付与される仕組みもあることから、少子高齢化に対する対策として国家が積極的に向き合っているということを感じた。理想とする社会像に近づけるための政策に尽力していることがわかる仕組みであった。

②ゴミ処理システム

Punggol地区で導入されているPneumaticWasteConveyance System[ニューマティック・ウェイト・コンベイヤー・システム] (WCS)

は、ゴミを地下の管路を通じて空気圧で自動搬送する先進的なゴミ処理システムである。住民は建物内の投入口にゴミを捨てるだけで、ゴミ収集車を使わずに集中処理施設へ送られる仕組みとなっている。これにより、悪臭や騒音の軽減、交通量の削減、衛生環境の向上が実現可能になり、環境負荷の低減にも大きく貢献している。

Punggol地区は民間ではなく政府が開発し進行している取り組みであるため、国内での実施につながりやすく、かつシンガポール全体の特徴としてデジタル化が進んでいるため新しい政策が早いスピードで実行されるということもわかった。

これらのことから、シンガポールは「デジタル技術によってデータを収集・活用し、その成果を迅速に施策へ反映させ、同時にデジタル化に不安を感じる人を支えるサポート体制を整えるという循環」を組み立てていく点において進んでいると感じた。

シンガポールは街全体から個人個人に及ぶまでデジタルで管理しているため、新しい政策が早いスピード間で実行されていることがわかった。住民が感じる「政策対応の柔軟性」や「立案から実行までの速さ」は一人一人がデータ社会に参画しているからこそ可能なのだと思った。このように広範囲にデジタル化を広げることは短期間でできることではないと感じるが、少しずつ変化させていくことが重要だと考える。



Punggol地区にあるゴミ箱

4. 外から見た日本の良さ

今回の研修でシンガポールとマレーシアの二カ国を訪問させていただいた。この経験を通して二カ国について学ぶだけでなく、現地の人から見た日本の印象を聞き、自国についても考えるきっかけになった。シンガポール大学の学生の方々と座談会させていただき、その際に今回の研修で学んだシンガポールの社会の仕組みについてどのように感じているか、逆に日本の社会像をどのように感じるかについて聞くことができた。そこで、学生たちは「日本のエンタメや文化が羨ましい」と言っていた。シンガポールはまだ国として若いこともあり自国特有のエンタメや文化が少ない現状にあるのだという。周りにある環境が当たり前になっていたからこそ日本を外から見た意見を聞いた時に改めてその価値に気づくことができた。

5. まとめ

本研修を通して、マレーシアとシンガポールがそれぞれ異なる形で多文化共生を実現していることを学んだ。マレーシアでは、ハラール認証やハーモニーストリートに象徴されるように、宗教や文化の違いを尊重し合う姿勢が社会に深く根付いていた。一方、シンガポールで

は、Punggol地区を中心にデジタル技術とデータを活用し、政策を迅速に実行する仕組みが共生社会を支えていることが印象的であった。また、海外から見た日本の魅力に気づいたことで、自国の文化や価値を再認識する機会にもなった。今回の学びを通して、違いを受け入れ支え合う仕組みづくりの重要性を理解し、今後は自分の行動によって多文化共生の実現に貢献していきたいと考える。



シンガポール国立大学との交流

参考

- SingaLife 「シンガポールの物件HDBとは？SingaLife編集部の体験談をお届け！」 <https://singalife.com/category/84206/> 2026年1月12日アクセス
- ALSUR 「2023年10月、シンガポールの住宅事情【公営住宅・HDB編】」 <https://www.alsur.co.jp/column/others/630/> 2026年1月12日アクセス
- SingaLife 「シンガポールのゴミ分別&捨て方を住居別に徹底解説！ゴミ出しは有料？粗大ゴミや電子機器は？」 <https://singalife.com/category/50801/> 2026年1月13日アクセス

マレーシア・シンガポール派遣研修を通じて考える 多文化共生とスマートネーションの あり方

大塚 史絵奈



1. はじめに

本稿では、今回の海外研修で得られた知見をもとに、多文化共生の推進および暮らしやすい街づくりを支えるスマートネーション政策の在り方について考察する。特に、シンガポールにおける取り組みを事例として、日本の現状との比較を通じて、制度設計や政策運用の観点からの特徴、課題、ならびに今後の政策立案に向けた示唆を整理することを目的とする。

2. 多文化共生

ALEPS（東方政策元留学生同窓会）のイスラミ氏の講話から、多文化共生について多くの示唆を得ることができた。イスラミ氏は、マレーシア人の国民性として「柔軟性」を挙げており、その背景には、多民族・多文化環境で生活することが日常であるという社会的土壌があると語っていた。異なる宗教や文化、価値観を持つ人々と共に生活する中で、相手を理解しようとする姿勢が自然と培われ、それがマレーシア人の柔軟性や高い適応力につながっているのだと感じた。

また、ムスリム文化への配慮について日本に何を望むかという問いに対し、イスラミ氏は「全面的な配慮」を求めるのではなく、例えばホテルなどにおいて、利用者が多い日や需要が見込まれる場面でムスリム向けの食事に配慮するなど、ビジネスの視点も含めた現実的な対応が重要だと述べていた。この考え方は、私がこれまで抱いていた「多文化共生＝相手文化を全面的に理解し、配慮すること」という一方向的なイメージを大きく更新するものであり、「多文化共生＝相互理解とバランス」という新たな価値観を形成する契機となった。無理に理想を追求するのではなく、持続可能な形で多文化が共存できる構造を維持することの重要性に気づかされた。

さらに、イスラミ氏は日本への留学経験を振り返り、「海外に行く意味とは、その国を知ること以上に、自分の国を理解することにある」と語っていた。一般的には、留学や海外渡航は訪問先の文化や社会を学ぶためのものだと思われがちである。しかし、異文化の人々から自国について説明を求められる中で、自分自身が自国について十分に理解していないことに気づき、結果として自国理解が深まる



という指摘は非常に印象的であった。少し異なる形ではあるが、私自身も今回マレーシア・シンガポールを訪れ、日本との比較対象を持つことで日本の特徴や輪郭がより明確になり、日本についての理解が深まったという実感があった。そのため、長期留学のように自国について説明する機会が多くなるとも、この感覚には強く共感することができた。

また、マラッカのハーモニーストリートを訪れ、青雲亭やカンポンクリン・モスクなど、異なる宗教文化の施設が徒歩圏内に存在している様子を実際に目にしたことで、多文化共生が空間的にも可視化されていることを実感した。宗教や文化は互いに異なるものでありながら、近接して存在しつつも過度に干渉することなく、相互に尊重する姿勢を保っていた。その静かな佇まいからは、互いの文化を尊重することで双方の存在を守っているような均衡が感じられた。

加えて、マレーシアは多文化・多民族国家であるがゆえに、「国民性としてのアイデンティティ」が必ずしも「個人のアイデンティティ」と直結していない点も、異文化を尊重する姿勢につながっているのではないかと考えた。単一の価値観に自らを強く結びつけるのではなく、多様な背景を持つ個が共存することを前提とした社会構造そのものが、多文化共生を自然なものとして成立させているように感じられた。

今回の学びを通して得た「相互理解とバランス」という多文化共生の考え方を、今後は一人の区民として、地域社会における異文化との関わりの中で、理想論に偏らない持続可能な形で実践していきたい。

3. 暮らしやすい街づくり<スマートネーション構想>

スマート・ネーションとは…人々がテクノロジーを活用してシームレスに意味のある充実した生活を送ることを可能にして、全てに対してエキサイティングな機会をもたらす場所。企業にとっては、より生産性が高く、デジタルエコノミーの新しいビジネス機会を獲得できる国。(スマート・ネーション・デジタル政府オフィス、2018年11月)

シンガポールでスマートネーション政策が必要とされた背景には、国の構造的制約がある。シンガポールは国土が狭く、天然資源にも乏しい都市国家であり、製造業や一次産業による成長には限界があった。そのため経済は早くから金融、物流、観光、医療などの第3次産業に大きく依存する形となった。

しかし、サービス産業中心の経済は人手や時間に依存しやすく、人口規模の小さい国家にとっては生産性の維持・向上が大きな課題となる。加えて、高齢化の進行や労働力不足が予測される中で、従来の人的資源に頼る成長モデルは持続可能性に課題があった。

そこでシンガポールは、ICTやデータ、AIといったテクノロジーを国家レベルで導入し、行政、交通、医療、都市管理などを高度に効率



化する「スマートネーション」構想を推進することで、限られた資源を最大限に活用し、国全体の生産性と競争力を維持・強化する道を選択した。

3.1 シングパス

①シンガポールのSingpass (シングパス)

Singpass (シングパス) は、シンガポール政府が提供する国民向けのデジタルIDであり、行政サービスや医療、金融、民間サービスに至るまで、個人認証の基盤として広く活用されている。国民や永住者は一つのIDを通じて、税務、社会保障、医療記録、各種申請手続きをオンライン上で安全に行うことができる仕組みとなっている。

Singpassにより国民のさまざまな情報がデータ化され、一元的に管理されることで、行政は個々人の状況に応じた公的サービスを、必要な人に必要な分だけ提供することが可能となっている。これにより、社会保障や支援の公平な分配が実現されるだけでなく、申請手続きの簡素化や迅速化にもつながっている。

また、このデータ基盤は一部の民間サービスとも連携しており、金融機関や保険、医療関連サービスなどにおいても本人確認や情報連携がスムーズに行われ、利用者の利便性向上に大きく寄与している。

②日本との比較

個人情報の一括管理については、日本ではプライバシーや情報漏洩への懸念から反発が起こりやすい。一方でシンガポールでは、政府への信頼感や、国家全体でデジタル化を推進しようとする国民意識の高さを強く感じた。

また、シンガポール政府の政策推進の姿勢として、「まずは導入し、運用しながら改善していく」という実践的なアプローチが一貫している点も、日本との大きな違いであると感じた。この柔軟性とスピード感が、Singpassをはじめとするスマートネーション施策の定着を支えていると考えられる。

3.2 プンゴル地区

①プンゴル地区の概要

シンガポール北東部に位置するプンゴル地区は、政府主導で開発が進められているスマートシティ実証エリアである。住宅、交通、医療、環境、行政サービスなどを一体的に設計し、新しいテクノロジーや社会システムのテストベッドとしての役割を担っている。

②政府主導の「基盤OS」的アプローチ

シンガポールでは、政府が共通のデジタル基盤（いわば「基盤OS」）を先に整備し、その上に各分野のソリューション（交通管理、へ





ルスケア、行政サービス等) を載せる形で政策を推進している。このため、個別技術がバラバラに導入されるのではなく、相互接続性や統合管理が前提となっている点が特徴的である。

③ プンゴル地区での実証とその展開

プンゴル地区でテスト実装されたテクノロジーや仕組みは、効果が確認されれば他の地区へ水平展開され、場合によっては海外への輸出も検討される。国内においては基盤OSを共有しているため、再現性が高く、他のソリューションとの併用や拡張も比較的容易である。

一方で、海外展開においては、この「基盤OS」自体をそのまま輸出できない場合が多く、個別ソリューションのみを導入する形になりがちである。その結果、シンガポール国内と同様の統合効果や運用効率を再現することが難しいという課題が残ると感じた。

④ 日本への示唆

日本においても、個々のソリューションを個別に導入する前に、政府レベルで共通の基盤OS (制度・データ連携・標準仕様を含む) を整備し、その基盤に合わせてソリューションを実装していくというアプローチを取ることで、長期的には政策運用やシステム連携の効率化が図れるのではないかと考える。

3.3 シンガポールのスマートネーション政策から学ぶ 国家運営の姿勢の違い

スピード感のある政策推進は、シンガポールの大きな強みである。実際に体感できる意思決定の速さや実行力は、国民や関係者からの信頼や期待を集めやすく、スマートネーション施策を社会に定着させる原動力となっている。

一方で、日本の強みは確実性や高い技術力にあり、それらは一見すると派手さはないものの、日本らしい国家運営を支えてきた重要なアイデンティティである。慎重な検証を重ねながら品質を担保する姿勢は、長期的な信頼性や安全性を必要とする分野において特に価値を持つ。

その象徴的な例として、マリーナベイ・サンズの屋上にあるスカイパークは、日本企業が設計・製作・施工を手がけており、日本の技術力がシンガポールの都市開発を支えていることが分かる。この事例からも、日本は単に内向きな技術国家ではなく、国際的にも高い技術協力を行える存在であることがうかがえる。

日本の確実性や技術力といった強みを活かしつつ、シンガポールのような推進力やスピード感を取り入れる姿勢こそが、今後の日本の社会システムや国家運営において重要であると感じた。

今回の研修を通して、制度そのものだけでなく、それを支える社会的信頼や推進姿勢が政策の実効性を左右することを学んだ。

多文化共生と都市のあり方

小川 日南太



1. 事前研修を通じて形成された問題意識

本ツアーは、渡航前の事前研修を含め、マレーシアおよびシンガポールと日本の関係を多角的に学ぶ機会として構成されていた。単なる海外視察ではなく、事前に問題意識を形成した上で現地に赴くことで、現場をより立体的に理解できる点に大きな意義があった。私はこれまで留学を通じて異文化交流を経験してきたが、今回のツアーでは、交流そのものよりも、社会構造や制度、価値観に目を向けることが求められた点が特徴的であった。

事前研修では、東南アジアの中核であるマレーシアおよびシンガポールと日本が、環境分野を中心にどのような連携を築いてきたのかを体系的に学んだ。両国は都市化の進展に伴う廃棄物処理やエネルギー需要の増大、気候変動対策といった共通課題に直面しており、日本との協力関係は、単なる技術供与にとどまらず、政策対話や成功モデルの共有を含む包括的なパートナーシップへと発展していることを理解した。こうした知識を得た上で現地を訪れることで、講座で学んだ内容を現実の社会に照らして検証する姿勢が自然と身についた。

2. 多民族・多宗教社会における共生の実態

事前研修で得た知識を踏まえて現地を訪れたことで、講座で学んだ内容を抽象的な知識としてではなく、実際の社会の中でどのように機能しているのかという視点から捉えることができた。まず強く印象に残ったのは、多民族・多宗教社会における共生のあり方である。

街中には大きなモスクや寺院が近接して存在し、宗教や人種の異なる人々が同じ空間で日常生活を送っていた。服装や言語、文化的背景は多様であるにもかかわらず、それが特別視されることは少なく、多様性そのものが自然な前提として受け入れられているように感じられた。日本のような単一民族社会では、少数派がどうしても目立ちやすい構造があるが、現地では誰かが際立って浮き上がる場面はほとんど見られなかった。

さらに印象的だったのは、多様性が声高に主張されることが少なく、共生が日常の前提条件として静かに存在していた点である。違いを意識し続けるのではなく、意識しなくてもよい状態を制度や空間の設計

によって実現しているように感じた。この経験を通じて、私は共生とはすべてを融合させることなく、違いを残したまま併存することもある一つの形であるという認識に至った。互いに隣り合って暮らしていても、価値観や宗教の違いを過度に問題視せず、一定の距離感を保ちながら共に生活する姿勢が社会に共有されている点は、日本社会を考える上でも示唆に富むものであった。

3. マレーシアにおける都市発展と格差の印象

マレーシアでは、都市の発展状況についても強い印象を受けた。高層建築が立ち並ぶ都心部は想像以上に発展しており、経済成長の勢いを感じさせた一方で、都心とそれ以外の地域との間には大きな差が存在していた。



発展したマレーシアの都市部

すべての地域が均質に発展していれば望ましいというわけではないが、これほどの差がある中で、住民がどのような不満や期待を抱いて生活しているのかについては考えさせられた。急速な成長を遂げる国において、経済発展と社会的安定をどのように両立させていくのかという課題が、現地の都市景観から浮かび上がってきた。

4. シンガポールの制度設計と生活環境

シンガポールでは、都市全体の清潔さと秩序の高さが際立っていた。公共空間はよく整備され、緑は多く、交通やゴミ処理の仕組みも合理的に設計されており、生活のしやすさを実感する場面が多かった。制度やルールが明確で、それが社会全体に浸透していることで、高い治安と快適な生活環境が維持されていると感じた。

一方で、その快適さは一定の管理や監視を前提として成り立っている側面もある。街中に設置された監視カメラは治安の良さに寄与しているが、同時に自由とのバランスについて考えさせられた。制度に従うことを前提とした社会は効率的である一方、価値観によっては窮屈さを感じる可能性もある。シンガポール社会は、快適性と秩序を重視するという明確な価値選択の上に成り立っていると理解した。

5. プンゴル地区に見る実験的都市づくり

シンガポールの中でも特に印象的であったのが、プンゴル地区の視察である。同地区は先進的な都市開発が進められており、実験的な取り組みが随所に見られた。建物同士を立体的に結び、人々の移動動線を工夫する都市構造は、限られた空間を有効活用しようとする発想の表れであった。

また、大学の施設と企業のオフィスが近接して配置されており、学術研究と産業活動が日常的に接点を持つ環境が意図的に設計されている点も興味深かった。研究成果が社会実装へとつながる過程を、物理的な距離の近さによって促進しようとする姿勢が感じられ、人材育成や

イノベーションを都市づくりの段階から組み込もうとする考え方が明確であった。

さらに、住宅についても、入居できる要件や利用の在り方が制度として合理的に設計されている点が印象的であった。誰でも自由に入居できる形ではなく、一定の条件やルールを設けることで、居住環境の安定や住宅の適切な利用が図られていると感じた。住宅を投機の対象としてではなく、生活基盤として位置づける発想が、都市全体の持続性を支えているように思われた。プンゴル地区は完成形の都市というよりも、試行錯誤を前提とした実験の場であり、新しい都市像を検証する役割を担っていると感じた。



大学と企業をつなぐ通路

6. 日本との関係を現地で捉え直す視点

事前研修で学んだ日本との制度的連携については、現地で生活する中で強く意識する場面は多くなかった。環境政策や行政レベルでの協力は、一般の生活者が日常的に実感するものではなく、社会の基盤として目立たない形で機能しているのだと理解した。

一方で、日本文化に対する親近感は随所で感じられた。日本文化が好きだと話す人や、日本への留学を希望する学生、現地で開催されている日本文化関連の行事などを通じて、人や文化のレベルでは日本との距離が非常に近いことを実感した。この経験から、制度の距離と文化の距離は必ずしも一致しないということを学んだ。

7. ツアー全体を通じた視点の変化と学び

本ツアーを通じて、私自身の日本やアジアを見る視点にも変化が生じた。シンガポールでは政策決定や制度改革のスピードの速さを実感し、日本は比較的安定的に運営されていると考えていたが、より柔軟で迅速な対応の余地があるのではないかと感じるようになった。

同時に、シンガポールが小国であるからこそ方向転換がしやすいという条件も理解できた。成功例をそのまま模倣するのではなく、国の規模や社会構造の違いを踏まえた上で評価する視点が重要である。現地の学生との対話を通じて、教育や就職を巡る考え方の違いにも触れ、制度だけでなく価値観や将来像の描き方にも国ごとの特徴が表れていることを実感した。

事前研修で得た知識と、現地での観察や対話を結び付けることで、国際協力や多文化共生を理想論としてではなく、現実の社会の中で機能する構造として捉え直すことができた。本ツアーは、海外を一方的な成功モデルとして見るのではなく、日本を含めた各国がそれぞれの条件の中で選択を重ねていることを理解する機会であった。こうした相対的な視点を得られたことこそが、事前研修を含めたツアー全体を通じて得た最大の学びである。



マリーナベイ・サンズ近くの芝生

二カ国を肌で感じて

櫻井 晃太郎



1. はじめに

今回のマレーシア・シンガポールにおける国際交流体験ツアーで思ったことや感じたことを記していこうと思う。シンガポールおよびマレーシアでの視察は、環境政策や多文化共生などがどのように都市や人々の生活に実装されているのかを具体的に理解する機会となり、千代田区の取り組みを考える上でも多くの示唆を与えてくれたのではないかと感じた。

2. 環境分野でのシンガポール、マレーシア

マレーシアに関しては空港からお店やホテル、道路などを含め街全体として開発が進んでいた。先進国ではないため発展途中ではあったが、その分国自身の余力が有り余っているのだろうなと街を見ていて感じた。街を歩いていて、多文化が混ざり合った地域であることなどが再確認できた。環境問題の深刻さと同時に、改善に向けた努力の途上にある現実を学んだ。特に印象的だったのは、廃棄物問題の中でも食品廃棄物の割合が非常に高い点である。経済成長とともに消費が拡大する一方で、廃棄物管理や市民の意識改革が追いついていない現状というのは、持続可能性の難しさを象徴しているのではないかと感じた。しかしその中で、日本との経済協力による脱炭素支援やカーボンニュートラルに向けた取り組みがしっかりと進められており、国際協力が環境改善の重要な鍵であることも理解できた。

次に訪れたシンガポールで印象的だったのは、環境配慮というものが「努力目標」ではなく、「社会の前提」として組み込まれている点であると考え。グリーンプラン2030のもとに、都市の中に緑地を増やす取り組みや、省エネ・再生可能エネルギーの導入、自転車や公共交通の活用促進などが強い政府のもとで確実に進められており、実際に街を歩くと、自然とそれらの仕組みを使う行動に導かれる構造になっていることが分かった。環境に良い行動を「選ばせる」のではなく、「自然とそうなる」ように設計されている点は、現地に行かなければ実感できなかった部分である。シンガポールは強い政府がいて、その政府をしっかりと国民が信頼をしているという点が全て





の政策において「とりあえずやってみる」ができる要因なのだろうなと深く思った。そしてまた、制度の実効性という点では、シンガポールの罰則の重さも強く印象に残った。日本では環境配慮が個人の善意に委ねられる場面が多いが、シンガポールでは環境を守ることが明確なルールとして位置づけられている。その結果、街の清潔さや緑地の維持がしっかりと保たれており、環境政策が実際の都市景観や生活の質に直結していることを身をもって体験した。

一方、特にマレーシアでは温室効果ガス排出や廃棄物管理の課題が依然として深刻であり、特に廃棄物の中で食品廃棄物が占める割合が高い現状を知ることができた。しかしその中で、日本との協力による脱炭素化支援やカーボンニュートラルに向けた取り組みが進められており、国際協力が環境政策を前進させる重要な要素であることも実感できた。

3. 都市開発目線で

次に都市開発目線での感想を書いていく。シンガポールで訪れたシンガポールシティギャラリーおよびPunggol地区の視察を通じて、都市開発において環境配慮が付加的な要素ではなく都市設計の前提条件として組み込まれていることを実感した。都市成長と環境保全は対立するものではなくて、むしろ相互に補完し合う関係として設計されている点が、都市全体から身をもって感じ取れた。シンガポールシティギャラリーでは、狭く限られた国土という制約を前提に、土地利用の効率化と長期的な都市ビジョンに基づく計画が示されていた。高密度化を受け入れながらも、緑地や水辺空間を都市構造の中心に位置づけ、人々の生活と自然が共存する都市像が描かれている。ここで印象的であったのは、環境配慮というものが都市開発の結果ではなくて出発点として扱われている点である。都市の将来像を描く段階でもうすでに、環境との関係性が織り込まれているということが、政策の一貫性につながっていると感じた。Punggol地区の視察では、このような計画思想が実際の居住空間にどのように落とし込まれているのかを具体的に確認することができた。同地区では、スマートシティの概念を活用し、エネルギー管理や・交通・公共空間の利用がデジタル技術によって最適化されている。公共交通や自転車移動を選択しやすい都市構造が整えられており、車に依存しすぎない生活様式というものが自然と促進されている点が印象的であった。マレーシア然り特にシンガポールでは都市開発というものが人の行動変容を前提に設計されていることである。基本的に多くの環境政策はどこの国や地域でも、個人意識や努力や善意に委ねられがちではあるが、Punggol地区では、都市構造そのものが行動を誘導する役割を果たしていたと感じた。環境配慮をした行動を選択することが特別な行為ではなく、日常の中で最も合理的な選択

「持続可能な考え方が当たり前の行動」になるよう設計されているのではないかと感じた。このような選択のアプローチというのは、持続可能な都市を実現する上で非常に効果的であると感じた。また、都市全体が機能ごとに分断されるのではなく、居住、教育、公共空間、自然環境が有機的につながっている点も印象的であった。都市の中に「移動する理由」が過度に発生しない構造は、結果としてエネルギー消費や環境負荷の抑制につながっている。これは、都市計画が基本生活の質と環境負荷の双方を同時に考慮する必要があることを示していると考ええる。今回の視察を通じて、都市開発における持続可能性というのは、個々人の技術や制度の導入だけでなく、都市の構造そのものをどのように設計するかにかかっていると強く感じた。都市が人の行動を形づくり、その積み重ねが環境負荷や生活の質を左右するという視点は、今後の環境分野を考える上で重要な基盤となるものであると思う。



4. 食べ物・食事目線での二カ国

日常に組み込まれた多様性と持続可能性は食文化にも色濃く出ていたのではないと思う。シンガポールでホーカーセンターを訪れた際に、食が単なる栄養摂取の手段ではなくて、都市の文化や社会構造、さらには環境とも深く結びついていることを強く感じた。ホーカーセンターは、多様な民族や文化背景を持つ人々の食を日常的に支える場であって、都市生活に欠かせない公共空間として機能していると思う。高価なレストランではなく、誰もが利用できるような形で多様な食文化が維持されている点は非常に特徴的であった。また、チャイナタウンなどで目にした食のあり方は、料理の味だけでなく、色彩や匂い、調理風景を含めた体験として都市に溶け込んでいた。食が街並みの一部として存在しており、人々の移動や滞留を生み出す要素になっていることが印象的であった。一方で、多くの料理がテイクアウト可能であることや、食材の大量消費が想定される構造から、食品廃棄や資源利用といった課題も同時に想起された。このように、食は文化的多様性を可視化する存在であると同時に、環境負荷とも直結する分野である。ホーカーセンターという日常的な空間だからこそ、持続可能な食のあり方を社会全体に広げる可能性があり、食を通じた環境配慮の重要性を現地で実感した。

5. 千代田区に向けて

今回最大の学びは、持続可能性は単独の施策によって達成されるものではなくて、都市開発・環境政策、食や文化といった複数の分野が相互に連動することで初めて実効性を持つという点だと考える。

シンガポール・マレーシアの事例からは、環境配慮が個人の意識や努力に依存するのではなく、都市構造や制度によって「自然と選ばれる行動」として設計されていることの重要性を学んだ。この視点を踏まえると、千代田区においても、都市開発や再開発の段階から環境配慮を前提条件として組み込むことが、今後ますます重要になると考える。建築物や公共空間の配置、移動手段の選択肢、エネルギー利用の在り方を工夫することで、区民や来訪者が無意識のうちに環境負荷の少ない行動を選択できる都市構造を形成することが可能である。また、環境政策を生活から切り離されたものにしないためには、食の分野との連携も有効であると感じた。日常的に利用される飲食の場やイベントを通じて、食品ロス削減や持続可能な消費の考え方を自然共有できる仕組みは、国民の行動変容を促す上で大きな力を持つと考える。特に食は誰にとっても身近なテーマであり、環境政策を自分ごととして捉えてもらうための重要な入り口になると私は考える。制度や情報提供の分かりやすさも重要である。環境配慮行動が特別な選択ではなく、経済的にも合理的で、最も選びやすい選択肢となるような仕組みを整えることで、持続可能な行動は一過性のものではなく、日常の一部として定着していくと考えられる。



6. 最後に

二カ国の現地視察を通して、環境問題は遠い世界の課題ではなく、都市のつくり方や日々の食事、移動といった身近な選択の積み重ねによって形づくられているものだと実感した。特に、シンガポールでは「環境に良いことをしている」という意識を強く持たなくても、自然と環境配慮型の行動が選ばれるような都市や制度が整えられており、その在り方に強い印象を受けた。この経験を通じて、自分自身も環境や持続可能性を、知識として知るだけでなく、日常の行動や将来の進路選択の中で実践していきたいと感じた。今回の学びを今後の学習や活動に活かして、持続可能な社会の実現に少しでも貢献できる存在になりたい。

ツアーでの体験から考える千代田区 の多文化共生とDX

柴田 珠和



1. はじめに

本報告書は、千代田区区民参加の国際交流体験ツアーに参加した経験をもとに、多文化共生やデジタル社会におけるまちづくりについて得られた知見や考察をまとめたものである。ツアーを通じて得た異文化理解や行政の取り組み、現地での体験を振り返り、千代田区の今後のまちづくりや多文化共生のあり方について考察する。

2. ALEPS会長イスラミ氏の講話を聞いて 感じたこと

イスラミ氏の講話を通じて、異なる文化や宗教を持つ人々と共生するために必要なマインドセットについて深く考えさせられた。マレーシアでは行政手続きにおいて人種を問われることが当たり前の世界だ。異なる人種の人々と共に暮らすことが日常となっている社会では、普段の生活で「違う人種の人だ」と意識することすらないそうだ。幼少期から様々なバックグラウンドを持つ人々と共に過ごす環境であるため、今日の前にいる人の人種や宗教に対して何らかの感情を抱くことは無く、ただ一人の「人」として接するのみであると話されていた。このような環境が当たり前となる背景には、幼少期から多様な文化や宗教を持つ人々と共に過ごす教育が重要なのではないかと感じた。

また、具体的な話題として、近年日本においてもハラール食への対応に苦慮する事業者のニュースを目にすることが増えているが、この点についてイスラミ氏は「ハラール食の冷凍食品を用意するだけでも、求める人にとってはありがたい」と述べていた。既存の生活や事業を根本から変えるのではなく、互いが少しずつ歩み寄ることが共生への第一歩であると感じた。大きな変化はすぐに受け入れがたいが、小さな変化を積み重ねることで、最終的にはマレーシアのように多様な文化や宗教が共生する社会へと近づいていけるのではないかと考える。

3. マラッカ訪問で感じたこと

マラッカを訪問した際、異なる宗教のために建てられた寺院やモ



マラッカにあるキリスト教の教会



マラッカにあるモスク



マラッカにあるヒンドゥー教の寺院



シンガポールのスーパーにある買い物かごの様子



シンガポールのスーパー内にあるヘルスメーターの様子

スクが隣接している光景に驚いた。西洋文化の流入によって多様な文化背景を持つ建築物が混在し、まさに文化の交差点を目の当たりにした。現地の人々が互いの宗教や文化を尊重し合いながら共生している様子から、多文化共生の実践例を肌で感じることができた。

実際に現地のモスク内を見学させていただいたところ、我々のような訪問者も暖かく迎え入れてくださった。モスクから出た際には、隣のヒンドゥー教の寺院に向かう方とすれ違った。このように当たり前に様々な宗教の方たちがともに生活している姿を目の当たりにできた。

4. JETRO訪問やプンゴル地域の視察で感じたこと

プンゴル地域はシンガポール内でも先進技術を活用し、街全体で実験的な施策を展開している地域である。ここで成功した施策を国全体、さらには世界へ広げることを目指しているようだ。「とりあえずやってみる」という姿勢で政府が様々な施策を実施している。0から100まで設計できていなくてもまずは小さなステップからでも実施してみるという取り組みへの積極性は、日本との大きな違いであると感じた。小さな地域単位だからこそソフトウェア軽く施策を試せる背景もあるはずだ。しかし、この点のみならず、このような施策の実施に対しても国民が大きく反対しないのは、過去の施策によって生活が便利になった実感があることが大きいと考えられるのではないだろうか。

さらに、実験的な施策の中でデータを収集し、他にできないかと検証するといった姿勢も、政府への信頼を高める要因であるのではないだろうか。一方で、国民視点では政府の施策は突然発表されることが多いそうだ。しかし、実施にあたっては十分な説明が行われるという。下院議員が各分野の専門家で構成されていることから、各施策に対する専門的な説明が可能であり、国民の理解と信頼につながっていると考えられる。これらの話を通じて、国として国民のために何ができるかを真剣に考え、実行する姿勢が国民に伝わり、信頼を得ているのだと感じられた。

5. マレーシアと千代田区の違い (多文化共生の観点から)

前述のとおり、マレーシアでは幼少期から異なる文化や宗教を持つ人々と共に過ごすことが当たり前となっているようだ。一方、千代田区では多くの人が日本人同士、近い文化や宗教を持つ人々と幼少期を過ごしているのではないだろうか。このような背景の違いから、日本人は自分の知らない文化や宗教を持つ人への理解が進みにくい傾向があると考えた。仮に、今すぐに幼少期の教育で多様なバックグラウンドを持つ人との交流が可能になったとしても、若い世代が成

長するまでには幾分長い時間が必要である。したがって、今すぐマレーシアのような多文化共生の環境を醸成することは難しい。しかしながら、少しずつ歩み寄ることは可能であるのではないだろうか。

突然今まで送ってきた自分の生活環境をも変えるような変化はだれしも簡単には受け入れがたいだろう。しかし、自らの生活環境を変えずとも異なる文化や宗教を持つ人への理解を進めることは可能だ。また、自分が知らないものに対して恐怖心や拒否感を感じることは当然であるともいえる。どんなバックグラウンドを持つ人々であっても同じ地域に住む住民として、お互いの文化や宗教のことを知ることから始めてみてはどうだろうか。

6. シンガポールと千代田区の違い (デジタルに関するまちづくりの観点から)

自らがIT関係の仕事をしていることから、昨今の官公庁におけるDX（デジタルトランスフォーメーション）には非常に興味を持っていた。そんな中でも、千代田区はデジタル戦略を積極的に推進していると感じ、特にAIといった最新技術も積極的に導入していることが印象的であった。しかし、こう感じたのは事前学習でDXの現状を知る機会があったからこそであり、明確に学ぶ機会がなければここまで千代田区のDXが進んでいることに気づけなかっただろう。つまり、実施している施策に対して「目的」が明確でなく、「説明」も十分に行われていない印象を受けた。一方、シンガポールでは施策の「目的」がはっきりしており、「説明」も明確に行われているため、住民の理解と納得が得られている。この点については大きな違いがあると感じた。

例えば、今回のツアーに参加するにあたって、初めて千代田区の「ポータルサイト」を使用した。書面や郵送のみでの受付ではなく、ウェブ上で必要事項を入力し提出することでも受付を完了させられた。ポータルサイトを見てみると、本当に様々な行政手続きがウェブ上で行えることが分かった。身近なものだと駐輪場の利用申請から、多様な補助金の申請、区のイベントの申し込みなど、多くの申請や申し込みがポータルサイトでは行えるようだ。恥ずかしながら、私自身は今回のツアーに申し込むまでこのポータルサイトの存在さえ知らなかった。せっかくこんなにも便利なデジタルツールが提供されているのだから、もっと多くの区民の方に知っていただき活用されるとより区民の生活が豊かになるのではないかと感じる。また、このようにデジタル戦略が進んでいる一方、電話や書面での受付を同時に行っているケースが多いように見える。デジタルソリューションの活用が得意でない区民にとっても困ることが無いように、可能な限り配慮されている点も同時に素晴らしいと感じる。

技術の力を借りて区民の生活の利便性を向上させるとともに、従来の暮らしを守る繊細な物事の進め方は、日本ならではのかもしれない。今回のツアーを通じて、シンガポールの「できることからにかくやってみる」という積極的な姿勢も時には大切だが、どちらかの考え一辺倒にならないよう物事を多面的に捉え進めていくことも大切なのではないかと気付かされた。

7. まとめ

今回の国際交流体験ツアーを通じて、多文化共生やデジタル社会におけるまちづくりの重要性や方向性を改めて学ぶことができた。異なる文化や宗教を持つ人々と共生するためには、幼少期からの教育や小さな歩み寄りが不可欠なのではないだろうか。また、行政や地域社会が住民に対して施策の目的や内容を明確に説明し、信頼関係を築くことが重要であると感じた。千代田区においても、今後さらに多様な価値観を受け入れ、住民一人ひとりが主体的にまちづくりに参加できる環境づくりが求められる。今回の学びを今後の活動に活かしていきたい。

マレーシア・シンガポールへの派遣で学んだ多文化共生社会

高橋 真衣



1.はじめに

今回の国際交流体験ツアーに応募したのは、国際化が進む中、多文化社会で暮らす人々がどのように自分のアイデンティティを構築しているのかを学び、自らの国際経験として次の世代に伝えていきたいと思ったからである。これらの目標達成を目指し、現地では多くの企業様やガイドの方からの話を伺い、班員同士の意見交換によってアウトプットをした研修期間は刺激が多くたくさんの学びを得た。この報告では、マレーシア・シンガポールへの派遣を通じて学んだ両国の「多文化共生」を目指す社会の取り組みについてまとめ、日本、そして千代田区にどう活用するかを考察する。

2. マレーシアの生活に根付いた多文化共生

2.1 ALEPS代表イスラミさんの講演での気づき

東方政策元留学生同窓会（ALEPS）代表のイスラミさんの講演から、国際化社会が進むからこそ海外に行く意義とマレーシアの「多文化共生」について学んだ。イスラミさんは、海外に行くことで訪問先の国だけでなく、自国の文化や考え方への理解も深まると述べていた。実際、海外では自分の国について説明する機会が多く、当たり前だと思っていた文化や習慣が、外から見ると珍しいものであると気づかされた。このような経験を若者が積める環境を整えることが重要だと感じた。

また、マレーシアは多民族国家であり、日常的に異なる文化を持つ人々と接しているため、慣れない言語を話す相手の意図を汲み取る力が自然に身につくという。一方、日本では新しいことへの柔軟な対応、すなわち異文化への適応に時間がかかる傾向にあると考える。例えば、英語の授業でも間違いを恐れて発言を控える生徒が多いとされる。さらに、日本のルールに戸惑う外国人に対して厳しい目が向けられることもある。多文化社会で育ったマレーシア人の寛容さは、新しい環境への高い適応力につながっている。外国人人口が増加する日本でも、違いを否定せず受け入れ、相手の立場を汲み取る姿勢がより求められると感じた。





2.2 ハーモニーストリート

西洋と東洋の文化が融合した世界遺産都市マラッカのハーモニーストリートでは、異なる宗教施設が立ち並び、多文化共生の様子を直接見る事ができた。仏教寺院、イスラム教のモスク、そしてザビエルが滞在していたとされるキリスト教の教会が近接して存在し、宗教ごとに地域が分けられていない点が印象的であった。現地では、どの文化とも断定できない建築物や食文化も見られ、複数の文化が暮らしの中で自然に融合していることを実感した。これは現地で暮らす人々が長い年月をかけて築いた「多文化共生」と言える。そして、宗教間の大きな争いではなく、互いの文化を受け入れ融合させて独自の文化を築いてきた歴史に触れたことは、日本では得難い貴重な体験となった。

3. シンガポール

3.1 シンガポール国立大学生との交流

シンガポールでの活動では、現地のシンガポール国立大学（NUS）に通う同世代の学生との交流を行った。その中で特に印象に残ったのが、彼らから投げかけられた「何を学んでいるのか」という質問である。日本人の私たちは、初対面の相手に対してまず出身地やどこに住んでいるのかを尋ねることが多い。しかし、多民族・多文化社会のシンガポールで育った彼らにとって重要なのは、「どこから来たのか」よりも「目の前の相手がどのような関心や価値観を持つ人なのか」という点であった。彼らは相手を「〇〇人」という枠組みで捉えるのではなく、一人の「個人」として理解しようとしているように感じた。この交流は、ツアー参加当初の目的であった「多文化国家で暮らす人々にとってのアイデンティティとは何か」を考える上で、大きな手がかりとなった。現地学生と話す中で、彼らはシンガポールが掲げるグローバル人材育成の中で学ぶ学生であることに誇りを持つ一方で、自分自身の学問や将来像に対する強いプライドも抱いていると学んだからである。このように、自分がどんな集団に属しているのかに依存し過ぎず、個人としての自信と自覚が彼らのアイデンティティを形成しているのではないかと感じた。



3.2 民族文化地区への訪問

シンガポールでは、チャイナタウンやアラブ・ストリート、リトルインディアを訪問し、多民族社会の歴史的背景を学ぶことができた。これらの地区は、植民地期に移民ごとに形成された居住地や商業地を起源としており、それぞれの文化や宗教が色濃く残っている。そのため、各地域で異なる国・地域の文化を感じることができ、まるで複数の国を旅しているような魅力があり、観光客にも人気のスポットとなっていた。一方で、独立後のシンガポール政府は、多民族国家としての秩序と調和を維持するため、民族や文化の固定的な棲み分けを防ぐ政策を進めてき

た。住宅政策などを通して、特定の民族が一地域に集中しないよう配慮することで、社会全体での共生を実現しようとしている。このように、歴史的に形成された民族地区を観光資源として活かしつつ、現代では制度によって融合を促す姿勢が見られた。政府による多文化共生への取組の例として、シンガポールで生活をしている日本人の方からはHDB（シンガポール住宅開発庁）建物と呼ばれる、政府によって建てられた集合住宅があると教えていただいた。HDB建物では、住民の民族比率を国全体の民族比率と同じになるよう配慮されているというのは興味深かった。日本では、外国人であることを理由に入居を拒否されることがあると聞く。シンガポールの制度をそのまま日本に導入するというのは困難だと思うが、多種多様な人々が共に生活していくために、自然な融合だけでなく、制度によって整頓された共生社会というあり方について考えるきっかけになった。

4. まとめ

今回のツアーを通して、マレーシアとシンガポールという二つの国の多文化共生社会の在り方を比較しながら学ぶことで、「多文化共生社会」の実現のためには、自然な融合や管理された共生社会など多様な形があることを実感した。マレーシアでは、日常生活の中で異なる文化や宗教が自然に交わり、互いを受け入れながら長い時間をかけて共生社会が築かれてきた。一方、シンガポールでは、政府主導の制度や政策によって秩序を保ちながら、多民族国家としての安定した共生が実現されていた。また、アイデンティティについては、多文化社会において国籍や民族だけでなく、個人の関心や学び、価値観によって形づくられていることを学んだ。

外国人の人口が増加し、多様な文化に触れる機会が広がる日本、そして千代田区においては、マレーシアのような異文化への寛容さとシンガポールのような他者を属性で判断するのではなく、一人ひとりを個人として理解しようとする姿勢を参考にすることが求められるだろう。例えば、区内に複数ある大使館と教育機関が協力し、子供たちに国際交流の機会を提供することや、歴代及び今回のツアーを経験した団員が多文化社会における異文化理解や自己の在り方について講演を行うといった活動に取り組みたい。



シンガポール・マレーシア海外派遣 を通じて得た都市と多文化共生に 関する考察

福島 都



1. はじめに（派遣の目的と問題意識）

本派遣は、千代田区が実施する海外交流事業の一環として、マレーシアおよびシンガポールを訪問し、現地の青少年、学生、企業関係者との交流や都市視察を通じて、国際理解を深めることを目的として実施されたものである。

両国はいずれも多民族・多文化社会でありながら、都市の成り立ちや制度設計、経済発展のプロセスが大きく異なる点に特徴がある。

短期間ではあるが、クアラルンプール、マラッカ、シンガポールという異なる性格を持つ都市を連続して訪問したことで、「都市はどのような思想のもとで設計され、人々の行動や価値観にどのような影響を与えているのか」という問いを、立体的に考える機会を得た。

本レポートでは、単なる訪問先の紹介にとどまらず、現地を実際に歩き、人と会話し、空気を感じたからこそ得られた気づきや感想を軸に、千代田区への示唆を整理する。

2. マレーシア：

宗教が生活に溶け込む都市のリアリティ

①クアラルンプールで感じた「宗教が時間をつくる」感覚

クアラルンプール市内を歩いて最も印象に残ったのは、宗教が生活の背景ではなく、生活のリズムそのものを形作っているという点である。

街中では一日に何度もアザーン（礼拝の呼びかけ）が響き、初めは観光地特有の演出のようにも感じられたが、数日過ごすうちに、それが人々にとって極めて日常的な「時間の合図」であることに気づいた。

日本では、時間は時計やスケジュールによって管理されることが多いが、ここでは宗教的時間が社会のリズムを作っている。そのため、礼拝時間を前提に商店の営業や人の移動が自然に調整されており、効率よりも信仰を軸にした秩序が成立しているように感じられた。この価値観の違いは、現地で体験して初めて実感できるものであった。

また、ペトロナス・ツインタワーをはじめとする超高層ビル群は経済成長の象徴である一方、その足元では伝統的な服装をした人々が



ペトロナス・ツインタワー



国家記念碑（マレーシア）

行き交い、モスクが生活圏の中に溶け込んでいる。近代化と宗教が対立するのではなく、同一空間で共存している点は、日本の都市風景とは大きく異なる印象を受けた。

②マラッカで体感した「重なり合う歴史」

マラッカでは、クアラルンプールとは全く異なる時間の流れを感じた。

オランダ広場やセントポールの丘では、ポルトガル、オランダ、イギリスといった列強による支配の痕跡が、現在も建築や街路として残されている。

特に印象的だったのは、これらの歴史が「過去の展示物」ではなく、観光や商業、生活の一部として現在も機能している点である。ハーモニーストリートでは、モスク、ヒンドゥー寺院、中国寺院が徒歩圏内に並び、多文化が制度によって分けられているのではなく、時間をかけて並存してきた結果として街に刻まれていることを実感した。

シンガポールのように制度で調整された多文化共生とは異なり、マラッカでは摩擦や不均衡を内包しながらも、それを抱えたまま共に生きてきた歴史が街並みに表れているように感じられた。一方で、都市インフラや生活環境には課題も見受けられ、ブミプトラ政策をはじめとする制度的背景が都市の在り方に影響している可能性についても考えさせられた。

3. シンガポール：制度が人の行動を導く都市

①「考え抜かれた都市」にいるという感覚

シンガポールに到着してまず感じたのは、街全体に無駄がなく、すべてが意図をもって配置されているという感覚である。

マレーシアとの国境から市内への移動やシンガポール内での公共交通機関の分かりやすさなど、初めて訪れたにもかかわらず、公共施設で迷うことがほとんどなかった。

シンガポールシティギャラリーでは、都市全体を一つのプロジェクトとして管理・設計している姿勢が示されており、土地や人口といった制約条件を前提に、将来像から逆算して政策が組み立てられていることが理解できた。この徹底した設計思想は、大きな衝撃であった。

②制度による多文化共生の「運用」

チャイナタウン、リトルインディア、アラブストリートを歩く中で、多文化が非常に分かりやすい形で可視化されている点が印象的であった。住宅政策や教育制度、食のルールなどによって、人々が日常生活の中で自然に交わる仕組みが作られている。



ガーデンズ・バイ・ザ・ベイ

ホーカーセンターでは、ハラール対応や衛生管理が制度として整理されており、文化の違いが摩擦になりにくい構造が整えられていると感じた（ハラールとノンハラールで食器を下げる台を分けるなど）。理念にとどまらず、運用レベルまで落とし込まれている点が、シンガポールの多文化共生の特徴である。

③学生・企業交流を通じた実感

シンガポール国立大学（NUS）の学生達との交流では、将来像を具体的に描き、学業やキャリアを戦略的に考えている姿勢に刺激を受けた。

英語でのコミュニケーションには緊張もあったが、意思疎通ができたことで自身の視野が広がったと感じている。

企業訪問では、政府の政策と民間企業の戦略が密接に連動しており、「規制を前提に成長する」という発想が根付いている点が印象的であった。

④プンゴル地区視察：

未来の生活为先取りする住宅都市（スマートシティ）

シンガポール市内視察の中でも、特に印象に残ったのが北東部に位置するプンゴル（Punggol）地区である。

かつて農村や湿地であったこの地域は、政府主導の都市開発により、若年層や子育て世代を主な対象とした計画的な住宅地として整備されている。

HDB（公営団地）を中心とした高層住宅でありながら、緑地や水辺空間が十分に確保され、「住む」「働く」「憩う」が徒歩圏内で完結する設計が徹底されていた。

また、環境配慮が個人の意識に委ねられるのではなく、制度と空間設計によって自然に選択される行動として組み込まれている点が強く印象に残った。

LRTによる交通網も整備され、自家用車を持たなくても生活が成立する構造は、環境負荷の軽減にも寄与していると感じた。

プンゴルの視察を通じて、都市は完成形ではなく、将来像に応じて更新され続けるものだという、シンガポールの都市観を実感した。

4. 千代田区との比較から得た示唆

千代田区とシンガポールはいずれも行政・経済の中核である点で共通しているが、シンガポールでは人の行動を前提に制度と空間を設計する、UI/UX的な発想がより強く感じられた。

プンゴル地区の事例からは、住宅、交通、環境、教育、産業を一体として計画することで、住民の行動やライフスタイルを無理なく誘導でき



アラブストリート



マーライオン

ることが示されている。

千代田区が持つ歴史や文化、知的資本を、どのように配置すれば人の動きや関わりが生まれるのかという視点は、今後さらに発展させる余地があると感じた。

5. おわりに（派遣を終えて）

今回の派遣を通じて、都市や社会は偶然の産物ではなく、制度・歴史・価値観の積み重ねによって形作られていることを強く実感した。

時間をかけて形成される共生と、設計によって導かれる共生という対照的な在り方から、多くの学びを得ることができた。

この経験を一過性のものにせず、今後の学びや地域社会との関わりの中で活かしていきたい。



マリーナベイ・サンズ

マレーシア・シンガポール研修の 現地報告

保立 美蘭



1. マレーシアでの学び

マレーシアではALEPSという団体の講義を受けた。ALEPSとは、主に高校生や若者を対象に、国際交流やリーダーシップ育成、異文化理解を目的とした活動を行っている団体である。留学や海外で学ぶことへの支援も充実しており、若いうちから将来の進路やキャリアについて、広い視野で考えられる環境が整っている点が魅力的であった。

講義の中で特に興味深かったことは、講師のイスラミ氏の話である。イスラミ氏は、「国際的な友人やネットワークをつくることの大切さ」と「他国の文化を理解するためにはまず自国の文化を説明できることが必要だ」ということを強調していた。その言葉から、自国について深く知ることが、国際交流の第一歩であると気付かされた。さらに、他国の人々の考え方や価値観を理解し、違いを受け入れる姿勢を持つことが、国際社会で生きていく上で欠かせないという話も印象的であった。

ALEPSの講義は、国際社会の中で生きていくために必要な視野の広さや柔軟な思考を身につけるきっかけとなり、今後の進路や生き方について考える上で大きな影響を与える貴重な経験であった。



2. シンガポールでの学び

2.1 JETROシンガポール

JETROとは、日本貿易振興機構の略称であり、日本企業の海外展開支援や、海外と日本を結ぶ経済活動を支援する役割を担っている。JETROシンガポール訪問時には、シンガポールの経済政策や社会の特徴、環境問題への取り組みについての説明を受けた。その中で特に印象に残ったのは、環境に配慮したビルの建設、EV自動車の普及、食料自給率の向上を目指す取り組みなどが、政府主導で進められている点である。中でも「グリーン・プラン2030」は、持続可能な社会の実現に向けた国家的な計画であり、明確な目標を掲げていることに強い印象を受けた。

また、シンガポールではテクノロジーを積極的に活用する一方で、高齢者などデジタル機器の使用が難しい人々への配慮も行われていることを学んだ。便利さだけを追求するのではなく、すべての国民が安心して生活できる社会を目指している姿勢から、国民から信頼される政府



の存在が、国全体のまとまりにつながっていると感じた。

2.2 プンゴル地区

プンゴル地区は、シンガポール北東部に位置するスマートシティのモデル地区であり、最新のテクノロジーを活用した実験的なサービスが多く導入されている地域である。ここでは、未来の都市の在り方を検証するため、さまざまな取り組みが行われていた。

その一例が、空気圧送式ゴミ収集システムである。この仕組みでは、各家庭から出されたゴミが地下のパイプを通して自動的に回収されるため、ゴミ収集車が街中を走る必要がなく、環境負荷や騒音の軽減につながっていると感じた。また、衛生面でも優れており、効率的で安全な都市づくりが考えられていることが分かった。

さらに、現地のスーパーマーケットでは、日本にはない先進的なサービスがあり、例えば、アプリと連携した買い物用カートが入口付近に並べてあった。また、医薬品や栄養補助食品が販売されている売り場には、体重計のような機器に乗るだけで身体の状態や栄養バランスを測定することができる。その測定結果をもとに、適した商品を提案してくれる健康測定機器等のテクノロジーが日常生活の中に自然に溶け込んでいる点がとても印象的であった。

加えて、プンゴル地区では、混雑緩和を目的とした人の流れをデータ化するシステムの実験も行われていると説明を受けた。防犯カメラやセンサーによって収集されたデータを分析し、人が集中しやすい場所や時間帯を把握することで、混雑の緩和や安全対策に役立てているという。このような仕組みが、日本の満員電車や観光地での混雑対策に応用されれば、移動の負担軽減や事故防止など、日本が抱えるさまざまな課題を解決する手がかりになるのではないかと感じた。

JETROシンガポールで学んだ国の方針と、プンゴル地区の取り組みは、どちらも未来を見据えた社会づくりに繋がっていた。今回の訪問を通して、テクノロジーと人の力を組み合わせることで、より良い社会を実現できることを学んだ。

3. 日本との比較

マレーシアとシンガポール、そして日本（千代田区）を比較して感じたことは、「多様性の受け入れ方」に大きな違いがあるという点である。マレーシアやシンガポールでは、さまざまな人種や文化、価値観を持つ人々が共に暮らしており、その違いが特別なものではなく、日常の一部として自然に受け入れられていると感じた。宗教や文化の違いが生活の中に当たり前のように存在し、それを前提として社会の仕組みが作られている点が印象的であった。

一方で、日本は、文化や価値観が比較的似ている人々が多く、社会のルールやマナーが統一されている。そのため、秩序が保たれ、安心



して生活しやすいという良さがある反面、外国人や異なる価値観を持つ人にとっては、環境に慣れるまでに時間がかかり、生きづらさを感じてしまう場面もあるのではないかと思った。

しかし、違いを排除するのではなく、互いに認め合い、違いを活かしていく姿勢を持つことが、これからのグローバル社会では重要であると感じた。マレーシアやシンガポールのように多様性を前提とした社会の在り方は、日本、特に千代田区のような都市が今後発展していく上で重要になると考えた。

4. 今後の活かし方

今回の国際交流体験ツアーでは、学校生活ではなかなか経験できない多くの学びを得ることができた。マレーシアやシンガポールでは、JETROやALEPS等の企業・団体を訪問し、それぞれの国がどのような考えで社会や経済を支えているのかを直接聞くことができたことが、とても貴重な経験であった。

また、企業訪問だけでなく、さまざまな観光地を訪れることができた点も印象に残っている。街の雰囲気や人々の暮らし、文化の違いを実際に目で見て体感することで、その国への理解が深まった。

今回の派遣を終えて、国際交流や多文化理解に対する意識が大きく変化した。今後は、千代田区で行われている留学生受け入れプログラムなどに積極的に参加し、今回の派遣で学んだことや感じたことを、実際に日本に來ている留学生に伝えていきたいと考えている。また、留学生の意見や考え方を直接聞くことで、自分自身の視野をさらに広げ、多文化理解をより深めていきたい。

さらに、高校での総合的な探究の時間では、シンガポールのプンゴル地区で行われているデジタル技術を活用した実験的な街づくりについて、日本と比較しながら調べていきたいと考えている。なぜシンガポールではそのような取り組みが進んでいるのか、日本ではどのような課題がありシステムの実験・導入が難しいのかを探究することで、日本の社会についても改めて考えるきっかけにしたい。

5. まとめ

今回の派遣は、単なる海外研修にとどまらず、自分の将来や日本の社会について深く考えるきっかけになった。これらの経験を一度きりで終わらせず、今後の学習や活動に継続的に活かしていきたい。



多文化共生の深層と 都市国家の戦略を歩く

茂木 茜



1. はじめに

千代田区主催のマレーシア・シンガポール国際交流体験ツアーに参加した。本報告では、現地の対話や視察から得た「日本の復興への視点」「宗教の融和」「徹底した合理主義とデジタル政策」などの知見を詳述し、今後の展望と千代田区への提言を記す。

2. マレーシア：歴史を乗り越えた相互尊重精神

① イスラミ氏から学んだ日本への眼差し

マレーシアに到着後、ALEPS（東方政策元留学生同窓会）のイスラミ氏より受けた講義は、日本を外側から捉え直す貴重な機会となった。マレーシア政府は、国をより良くするために日本から学ぼうと考え、自国の予算で多くの学生を日本へ送り出してきたという。なぜ日本だったのか。その理由は、日本が世界で唯一の原爆被害を受けた国だからだという。甚大な被害を受けたにもかかわらず、そこからどのように復興を遂げたのか、そのプロセスをマレーシアは重要視したのだ。40年前、マレーシアは農業中心の国であったが、現在は農業だけでなく水産業も盛んになり、目覚ましい発展を遂げている。

現地を訪れて分かったのは、彼らが過去の歴史を大切にしながらも、今の日本を「かつての支配国」という文脈だけで捉えていないことだ。「昔の日本と今の日本は違う」と明確に切り分け、リスペクトを持って接してくれる姿勢に、過去を乗り越えて未来を築こうとする強い意志を感じた。また、国際理解の本質とは、単に情報を得ることではなく、相手の国を多面的に理解することで、自分たちの文化をより深く再認識することなのだと、イスラミ氏の言葉を通じて痛感した。

② 「混ざり合わないもの」が共存するハーモニーストリート

マレーシアの多文化共生を象徴する「ハーモニーストリート」の散策は、特に印象深い体験であった。そこには、中国の影響を受けた意匠のユニークなイスラム教の建物があつた。外観はまるで仏教寺院のようでありながら、中に入るとお祈りの前に手足を清める場所があり、ヒジャブの貸し出しも行われていた。これまで「相容れない」と考



えていた異なる文化圏の要素が、一つの建物の中に当たり前のように溶け込んでいる光景は、衝撃的でした。少し歩けば、イスラム教エリア、少し戻ればヒンドゥー教の寺院が佇む。この「混ざり合わないものが、すぐ身近にある」という状態こそが、マレーシアにおける多文化共生のリアルな姿である。幼少期から異なる宗教や文化を持つ友人が身近にいるという環境が、土地や宗教間の争いを未然に防ぎ、互いを尊重し合う「静かな共生」を可能にしているのだと感じた。

3. シンガポール：徹底した合理性とアイデンティティの模索

①建国の過酷さとアイデンティティの構築

シンガポール国立博物館で目にした初代首相リー・クアンユーの言葉や展示からは、この国の根幹を理解するヒントを得た。1965年のマレーシアからの分離・独立は、民族対立が大きなきっかけであった。多様な民族を抱えたまま、資源のない小さな島国として独立したシンガポールが、現在の繁栄を実現するまでには過酷な道のりがあったはずだ。

リー・クアンユーは、国旗や国歌といったシンボルが、国民の間に強い感情的な結びつきを育むために不可欠であると考えた。博物館の展示を通じて、国家としてのアイデンティティをゼロから構築しようとした指導者の執念を感じ取ることができた。こうした歴史があるからこそ、シンガポールは多様性を認めつつも、一つの「国家」としてまとまるための強い意志をもち続けているのだと感じた。

②多文化共生の「制度による管理」

現地を訪れて分かったのは、シンガポールの多文化共生は、政府による徹底した管理と「目に見えない線引き」のもとにあるという点だ。例えばプンゴル地区の住宅政策（HDB）では、マンション内の人種割合が厳格に定められている。これにより、特定のコミュニティが閉鎖的になることを防ぎ、強制的に「混ぜる」ことで調和を保っている。多民族国家として存続するために、各民族のアイデンティティを尊重しつつも、紛争の種を未然に摘み取るという国家の在り方が非常に印象深かった。

③国家戦略としての少子化・インフラ対策

シンガポールの合理性は生活インフラの随所に表れている。出生率が1%を割り込む危機に対し、政府は住宅政策を国家戦略として運用し、若年層の結婚・出産を促す一方、独身者には年齢制限を課すなど徹底している。

また、車両走行権利（COE）の入札制による混雑緩和や、地下管を

用いたゴミのデータ管理システムなど、目的達成に向けた手段に一切の迷いがない。特にテクノロジーを迅速に社会実装し、改善へと繋げるスピードと覚悟は、日本が学ぶべき重要な示唆に富んでいる。

4. デジタル化の光と影

JETROシンガポール事務所での視察では、この国のデジタル政策の深層について学ぶ機会があった。シンガポールでは「シングパス」によって、学業成績から銀行口座に至るまで、国民の情報が一箇所で記録・管理されている。

利便性は極めて高い一方で、急速なデジタル化は高齢層などにとって課題となっている面もある。ここで感銘を受けたのは、政府がすべてをオンライン化するのではなく、必要に応じて対面相談窓口などのアナログな対応を併用している点だ。効率を追求しながらも、利用者のニーズに応えるための柔軟性を持ち合わせているこのバランス感覚こそが、テクノロジーを社会インフラとして定着させる鍵なのだと学んだ。

5. 千代田区への提言

今回の学びを千代田区の発展に繋げるため、以下の2点を提案したい。

①「千代田版シングパス」の

試験的導入と行政のワンストップ化

千代田区は昼間人口が多く、ビジネスと居住が混在する特異なエリアである。シンガポールのシングパスを参考に、区独自のアプリ等で、行政手続き、地域通貨、図書館利用、災害時の安否確認などを一括管理する仕組みを強化すべきである。特に若年層にとって、行政が「一つの入り口」で完結することは、地域への帰属意識を高める要因になる。もちろん、デジタルに不慣れな層を置き去りにしないための詳細な説明と、アナログな窓口対応の併用をセットで行うべきだ。利便性と安心感を両立し、政府が国民に対して丁寧な説明を心がけるシンガポールの姿勢に倣った行政運営を期待したい。

②区内学校と企業を結ぶ「ブリッジ・プログラム」の創設

シンガポールの視察では、企業と大学が物理的に「橋」で繋がっているなど、学校教育とビジネスが極めて密接であることに驚かされた。千代田区には多くのグローバル企業や官公庁が拠点を置いている。この強みを活かし、区内の高校とこれらの組織をより密接に連携させる仕組みを提案する。単なる「職業体験」に留まらず、社会課題の解決を企業と生徒が共に行う長期的なプロジェクトを推進することで、国際的な視座を持った次世代リーダーを育成できるはず

だ。学校教育と実社会を直結させる先進的なモデルの構築を期待する。

6. おわりに

このツアーを通じて、私は自分の視野を広げると同時に、当たり前だと思っていた価値観を見直す機会を得た。マレーシアで見た「違いを認め合う自然な寛容さ」と、シンガポールで見た「目的達成のための徹底した合理性」。これらを自分の肌で感じたことで、情報の裏側にある「真実」を掴むことができた。国際理解とは、単に外国語を話せるようになることではなく、相手の歴史や価値観の違いを深く理解し、その上で自分たちがどうあるべきかを問い続けるプロセスそのものである。今回得た知見と自分自身の成長を糧に、これからの社会で多角的な視点を持った人間として歩んでいきたい。最後に、このような貴重な学びの機会を提供してくださった千代田区の皆様に、心よりお礼申し上げます。ここで得た刺激をこれから自分自身の挑戦に必ず繋げていく決意である。



多文化共生の在り方

米田 真生



1. はじめに

本研修報告書では、マレーシアおよびシンガポールでの国際交流体験を通して学んだ、多文化共生のあり方について述べる。両国はいずれも多民族・多宗教社会でありながら、その共生の形は日本とは大きく異なっている。本研修では、現地の街並みや人々の生活、制度や歴史的背景に触れることで、多文化共生を「特別なもの」として捉えるのではなく、社会の前提として受け入れる姿勢を学ぶ機会となった。また、本研修は異文化理解にとどまらず、自身の行動や意識の変化を促す経験でもあった。言語や文化の違いに対する不安から、これまで自ら行動を起こすことを避けてきた場面も多かったが、現地での交流を通して、その姿勢を見直すきっかけを得た。本報告では、まずマレーシアおよびシンガポールで得た学びを整理し、その後、研修を通して得た自身の変化を振り返る。最後に、これらの経験を踏まえ、千代田区における国際交流の促進に向けた提案をまとめることで、本研修の成果を地域へ還元することを目的とする。



2. マレーシアでの学び 多文化共生を特別視しない社会

マレーシアで特に印象に残ったのは、多文化・多宗教が生活の中に自然に溶け込んでいる社会の在り方である。街を歩くと、モスクや教会が当たり前のように存在し、人々は自らの信仰を隠すことなく日常生活を送っていた。異なる宗教を持つ人々が同じ空間で過ごしていても、互いを否定したり、特別視したりする様子は見られず、それが社会全体の空気として根付いているように感じられた。日本では、宗教は個人のプライバシーとして扱われることが多く、話題に出すこと自体を避ける傾向がある。その結果、異文化に対して過度に慎重になり、無意識のうちに距離を取ってしまう場面も少なくない。一方、マレーシアでは、幼い頃から多様な文化や宗教に触れる環境が整っており、それらを「違い」としてではなく「日常」として受け入れる姿勢が育まれていると感じた。街に漂うドリアンの強い匂いに最初は驚いたが、それも含めてその土地の生活の一部であり、文化そのものであると捉えられるようになった。この体験を通して、違いを無理に



理解しようと構えるのではなく、「そこにあるもの」として受け止める姿勢こそが、多文化共生の基盤であると学んだ。



3. シンガポールでの学び挑戦を前提とした社会

シンガポールでは、人種の多様性の高さに加え、都市全体の洗練された雰囲気強く印象に残った。企業や施設を訪問する中で共通して感じたのは、「まずやってみる」という姿勢が社会全体に浸透している点である。日本では、計画を細部まで固め、高い完成度を目指してから実行に移すことが多いが、シンガポールでは、一定の準備が整った段階で試行的に取り組み、改善を重ねながら前進していく考え方が主流であると感じた。この背景には、1965年にマレーシアから分離独立し、限られた資源と国土の中で国家として生き残る必要があった歴史があると考えられる。特に印象的であったのが、国民向けデジタルIDである「Singpass」の存在である。行政手続きの多くが一元化されており、国民と政府との間に高い信頼関係が築かれていることがうかがえた。この経験から、制度の違いだけでなく、国と国民の関係性そのものが社会の在り方に大きく影響していることを実感した。

4. 研修を通して得た自身の変化

本研修を通して、自身の行動や考え方にも変化が見られた。今回の研修では、自分から行動しなければ交流が生まれない場面が多く、当初は戸惑いや緊張を感じることもあった。これまで私は、英語を話せない状態で交流することは相手に迷惑をかけるのではないかと決めつけ、行動を避けてきた。しかし、本研修ではシンガポールで学んだ「まずやってみる」という姿勢を意識し、自身の成長のために一歩踏み出すことを選んだ。その結果、人と話す際の緊張が徐々に和らぎ、自分の考えを自分の言葉で伝えることへの抵抗が軽減された。短期間の研修であっても、環境に身を置き、行動を重ねることで意識が変化することを実感した。この経験は、今後新しいことに挑戦する際の大きな自信につながると感じている。

5. 千代田区への還元に向けた提案

本研修で得た学びを千代田区に還元する取り組みとして、過去の国際交流体験ツアー参加者を中心とした国際交流会の開催を提案したい。体験の共有が参加者同士に留まってしまうのではなく、参加者自身が企画に関わることで、より多くの区民が国際交流を身近に感じられる場を作ることができると考えた。参加対象は千代田区在住者を優先し、友人同士での参加も可能とすることで、地域に根ざした交流の場としたい。内容としては、日本のお菓子を囲んだ会話や、日本や海外の遊びを一緒に体験するなど、気軽に参加できる形

式を想定している。めんこやヨーヨー釣りといった日本の遊びを通して、マレーシアで感じた「違いを特別視しない雰囲気」を千代田区でも体験できる場を目指したい。

6. まとめ

本研修を通して得たのは、多文化共生に関する知識だけでなく、自ら行動する姿勢と、多様性を自然に受け入れる視点であった。これらの学びを一過性のものにせず、地域への還元や今後の行動につなげていくことが重要であると考えている。マレーシアおよびシンガポールでの経験を、自身の成長と千代田区における国際交流の活性化の双方に活かしていきたい。



05

募集案内・事前研修会チラシ



団員募集チラシ

マレーシア・シンガポールを訪問し、戦争・歴史、環境・科学技術、多文化共生・多民族国家などに関する施設の見学、現地の人々との交流を行います。調査団での活動を通じて、貧困・環境・平和・人権など世界が抱える課題を一緒に考えてみませんか。

写真提供：一般財団法人自治体国際化協会

事前研修会(報告会)チラシ

全4回・連続講座 (参加無料・事前申込制)

千代田グローバルセミナー2025



マレーシア・シンガポールを知ろう

マレーシア・シンガポールの歴史や多文化社会、環境科学技術をさまざまな視点から学び、貧困・環境・平和・人権など世界が抱える課題を一緒に考えてみませんか。

会場：区役所会議室またはオンライン(Teams)【各回定員有り】

第1回

ハイブリッド開催

10/24(金) 18:30～20:00

マレーシア・シンガポールの歴史

【講師】平島(奥村)みさ氏(東洋大学教授)

第2回

ハイブリッド開催

10/29(水) 18:30～20:00

マレーシア・シンガポールの
多文化社会の比較

【講師】平島(奥村)みさ氏(東洋大学教授)

第3回

ハイブリッド開催

11/12(水) 18:30～20:00

マレーシア・シンガポールと日本との
環境分野での連携【講師】川又孝太郎氏
(千代田区ゼロカーボン推進技監)

第4回

会場のみ

2/10(火) 18:30～20:00

マレーシア・シンガポール
国際交流体験ツアー報告会

写真提供：一般財団法人自治体国際化協会シンガポール事務所

主催
問合せ先

千代田区 国際平和・男女平等推進課 国際平和係
〒102-8688 千代田区九段南1-2-1 (千代田区役所6階)
電話：03-5211-4165(直通) 平日8時30分～17時15分

申込詳細は
裏面をご参照
ください



(11) 広報千代田 令和8年2月20日号

ピックアップ

区役所の代表電話 ☎ 03-3264-2111



国際交流体験ツアー

マレーシア・シンガポール 派遣報告




区では、人類が抱える課題を主体的に考え、積極的に行動できる人材育成のため、区内の青少年を海外へ派遣しています。令和7年12月8日～14日の1週間、公募で選ばれた高校生・大学生・社会人の12名をマレーシア・シンガポールに派遣し、現地の事情調査を行いました。

今号では、団員が現地での施設見学や人々との交流を通じて学んだ「多文化共生」「スマートシティ」「都市開発・環境科学技術」の報告をします。

現地での活動内容や学んだことをまとめた報告書を作成しています。報告書は3月下旬からHPまたは問合せ先の窓口で閲覧できます(無償配布もあり(数に限りあり))。

問合せ 国際平和・男女平等人権課国際平和係 ☎ 03-5211-4165




多文化共生(シンガポール)

① ホーカーセンター

中華、マレー、インドなどさまざまな民族料理が一堂に会するホーカーセンター(屋台村)を訪ねました。シンガポールのホーカーセンターは「多文化都市における料理とコミュニティ・ダイニング」としてユネスコ無形文化遺産に登録されています。



ハラールとノンハラールで食品が分けられている

report

ハラール対応や衛生管理が制度として整えられており、文化の違いが摩擦になりにくい構造が整えられていました。残念にとどまらず、運用レベルまで落とし込まれている点が、シンガポールの多文化共生の特徴であると感じました。



② シンガポール国立大学の学生と交流

シンガポール国立大学(NUS)の日本研究会の学生4名と交流を行いました。



report

NUSの学生に、日本は今後どのように多文化共生を進めていくべきかを尋ねたとき、「シンガポールで多文化共生が進んでいるのは、幼い頃から海外の人が隣にいたことが普遍的(当たり前)だからだ」という言葉をかけられたことが強く記憶に残っています。この経験から、近年外国人住民が増加している区においても、子どもたちが日常的に海外にルーツを持つ人々と出会い、多文化に触れられる機会を創出することが不可欠だと考えました。これまでの国際交流イベントに加え、学校や図書館、美術館などの公共施設と連携し、地域全体で継続的に交流できる仕組みがあるとよいと感じました。

「自分とは異なる相手の存在」を当たり前の日常として受け入れられるよう、幼少期から多文化に触れる機会を広げていくことが、今後ますます求められていると考えます。



多文化共生(マレーシア)

● 東方政策元留学生同窓会(ALEPS)

※1958年に設立された、マレーシア政府により国費支援された東方政策の前身組織

会長のイスラミ氏からマレーシアと日本をつなぐ国際交流活動について講演いただきました。



後列右から3番目イスラミ氏

report

イスラミ氏による講演は、日本を外側から捉え直す貴重な機会となりました。マレーシア政府は、国の発展のために日本から学ぶと考え、自国の予算で多くの学生を日本へ送り出してきたそうです。その背景には、恵まれたという大きな被害を受けながら、復興を遂げた日本の歩みに学ぶという姿勢がありました。特に印象的だったのは、マレーシアの人々が歴史を大切にしながらも、日本を「かつての支配国」という文脈だけで捉えていない点です。「昔の日本と今の日本は違う」と明確に切り分け、リスクベクトルを持って接してくれる姿勢に、過去を乗り越えて未来を築こうとする強い意志を感じました。国際理解の本質とは、相手の国を多面的に理解することで、自分たちの文化をより深く再認識することなのだと、イスラミ氏の言葉を聴いて痛感しました。



report

イスラミ氏は、マレーシア人の国民性として「柔軟性」を挙げ、その背景には多民族・多文化の環境で生活することが日常になっている社会的土壌があると語っていました。異なる宗教や文化、価値観を持つ人々と共に暮らす中で、相手を理解しようとする姿勢が自然と育まれ、それが高い適応力や柔軟な考え方に繋がっているのだと感じました。



また、ムスリム文化への配慮について何を望むかという問いに対し、イスラミ氏は「全面的な配慮」を求めるものではなく、需要が見込まれる場面でムスリム向けの食事に対応するなど、ビジネスの視点を踏まえた現実的な対応が重要だと述べていました。この考え方は、私がこれまで抱いていた「多文化共生は相手文化に全面的に配慮すること」というイメージを見直すきっかけとなりました。多文化共生とは、相互理解とバランスを大切にしながら、無理のない形で共存していくことが重要であると学びました。

● マラッカ訪問

世界遺産の港町マラッカを訪れ、西洋と東洋の文化が共存する多様性に満ちた街並みを視察しました。



青雲寺/1646年に建てられたマレーシア最古の中国寺院。ハーモニーストリートにある



マラッカキリスト教会/オランダ領時代の1753年に建てられたマレーシア最古のプロテスタント教会



カンボン・アリン・モスク/1748年にインド系のイスラム教徒によって建てられたモスク。ハーモニーストリートにある

report

マラッカの「ハーモニーストリート」では異なる宗教施設が隣り合い、人々が特別なことではなく日常の一部として、互いの文化を尊重しながら暮らしている様子が印象的でした。現地では、特定の文化に限定されない建築や食文化も見られ、複数の文化が自然に融合していることを実感しました。



多文化共生を
学んで

外国人の増加により、多様な文化に触れる機会が広がる日本。そして区においては、マレーシアに見られる異文化への寛容さ、シンガポールのように他者を属性ではなく一人ひとりの個人として理解しようとする姿勢が参考になると考えます。今後は、海外派遣を経験した団員が多文化社会での学びを伝える講演を行うなど、地域全体で多文化理解を深める取り組みを進めていきたいです。

スマートシティ(シンガポール)

● プンゴル・デジタル地区

シンガポール初のスマートビジネス地区であるプンゴル・デジタル地区を視察しました。住宅・大学・企業が集積した地域であり、都市政策やまちづくりなどの新たな取り組みを検証・実験できる地区です。



大学と企業をつなぐ通廊



効率的で健康な生活を送るための建物



プンゴル・デジタル地区にあるスマートダストボックス



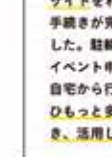
プンゴル・デジタル地区のスーパーに設置されている健康測定機

report



大学の施設と企業のオフィスが近接して配置されており、学術研究と産業活動が日常的に接点を持つ環境を意図的に設計している点が印象的でした。研究成果を社会実装へとつなげる過程を、物理的な距離の近さによって促進しようとする姿勢が感じられ、人材育成やイノベーションを都市づくりの段階から組み込もうとする考え方が明確に示されていました。

report



シンガポールでは、施策の「目的」や「説明」が明確に示されているため、住民の理解と納得が得られていると感じました。今回のツアー参加をきっかけに初めて区ポータルサイトを利用しましたが、ウェブ上で多くの行政手続きが完結する利便性の高さに驚きました。駐輪場の利用申請や補助金申請、イベント申し込みなど、身近な手続きを自宅から行える便利なツールであり、ぜひもっと多くの区民の方に知っていただき、活用してほしいと感じました。

report



ダストボックスを通じ、ゴミが地下のパイプを通って自動的に回収されるため、ゴミ収集車が街中を走る必要がなく、環境負荷や騒音の軽減につながっていました。衛生面でも優れており、安全で効率的な都市づくりが行われていることを実感しました。

また、現地のスーパーマーケットには健康状態を測定できる機器が設置され、測定結果をもとにした商品提案するなど、先進的なテクノロジーが生活の中に自然に取り入れられている点が印象的でした。

都市開発・環境科学技術(シンガポール)

シンガポールは、限られた土地と資源を最大限に活用し、持続可能な都市開発を進めています。都市開発・環境科学技術に関する施設の視察や講演を通じて、同国の先進的な取り組みやまちづくりの理念について学びました。

ガーデンズ・バイ・ザ・ベイ

シンガポール建国当初から定められてきた緑化政策は、「City in a Garden」へと転換し、ガーデンズ・バイ・ザ・ベイは政策のシンボルとなっています。

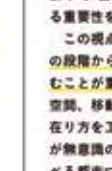


シンガポールシティギャラリー

シンガポールの都市計画や歴史を学ぶことができます。



report



最大の学びは、持続可能性は一つの施策だけで達成されるものではなく、都市開発・環境政策、食や文化など複数の分野が連動することで初めて実効性を持つという点です。現地の事例から、環境配慮が個人の意識や努力に依存するのではなく、都市構造や制度によって「自然と選ばれる行動」として設計されている重要性を学びました。

この視点を踏まえると、都市開発や再開発の段階から環境への配慮を前面として組み込むことが重要だと感じました。建築物や公共空間、移動手段の選択、エネルギー利用の在り方を工夫することにより、区民や来訪者が無意識のうちに環境負荷の少ない行動を選べる都市づくりが可能になると考えます。

また、食は誰にとっても身近なテーマであり、飲食の場やイベントを通じて食品ロス削減の取り組みや持続可能な消費の考え方を伝えることで、環境政策を「自分ごと」として捉えてもらう有効な入り口になると考えます。

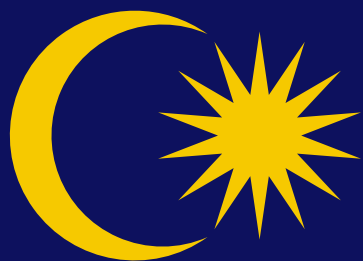
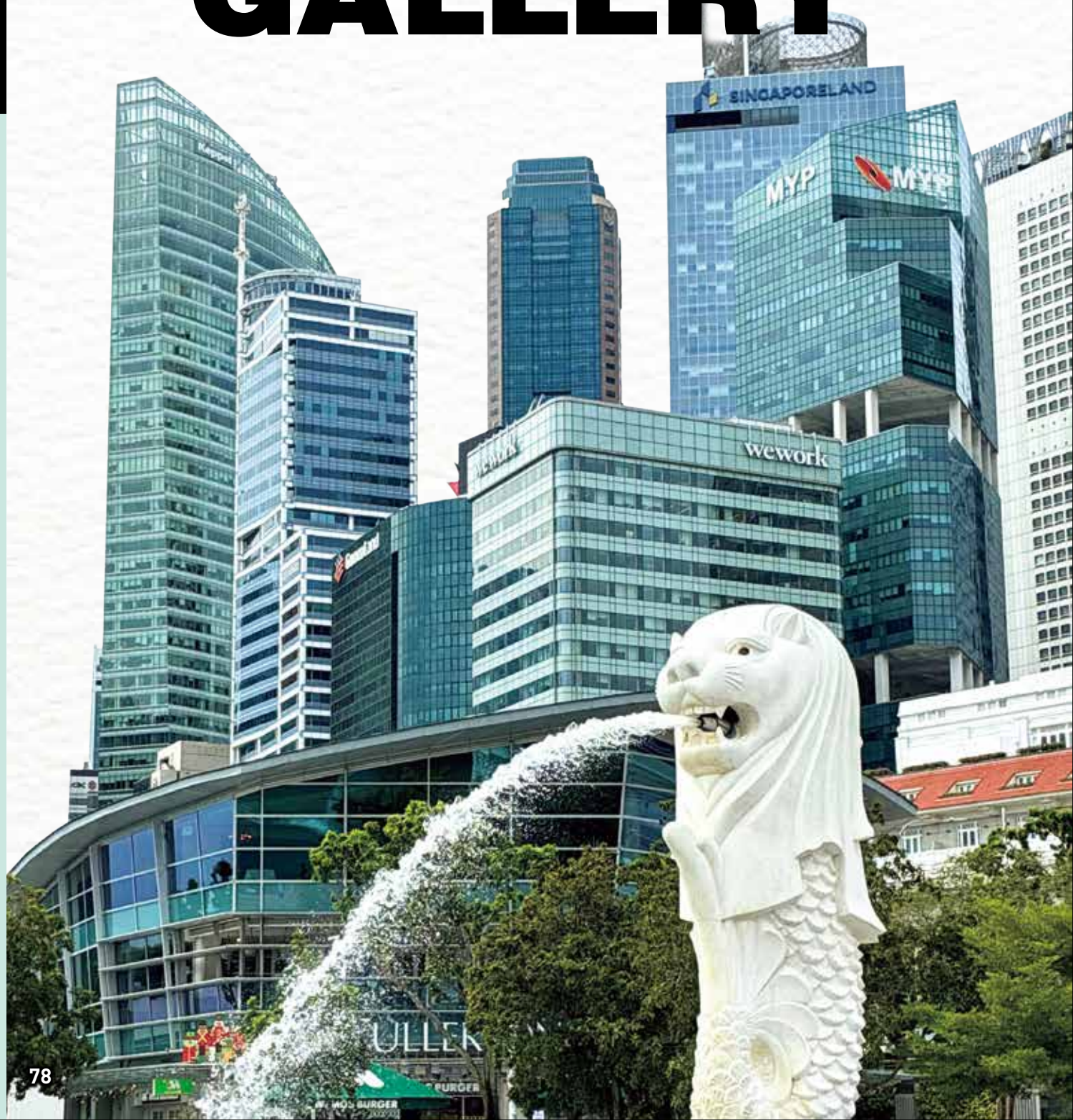


PHOTO GALLERY



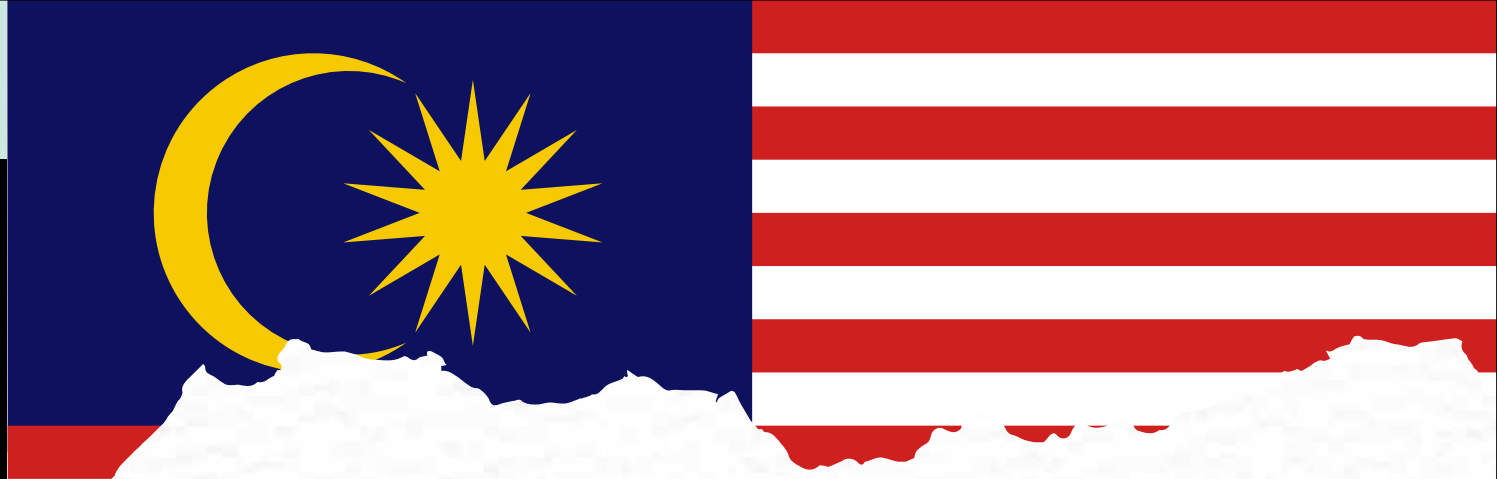


MALAYSIA



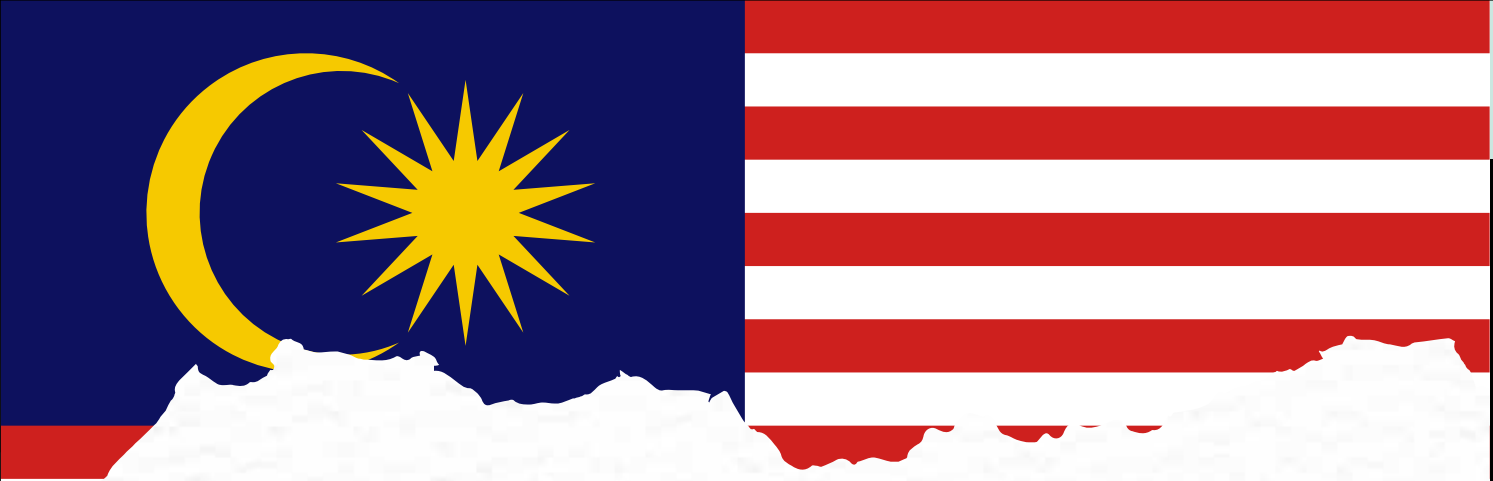
東方政策元留学生同窓会 (ALEPS) の講演





MALAYSIA





MALAYSIA



SINGAPORE

アジア大洋州住友商事会社にて



JETROシンガポール事務所にて



SINGAPORE

シンガポール国立大学との交流

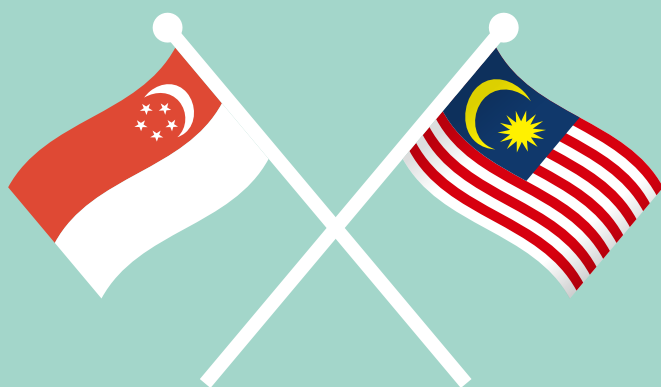


SINGAPORE



**令和7年度
マレーシア・シンガポール国際交流体験ツアー報告書**

- ・発行年月 令和8年（2026年）3月
- ・編集 集 マレーシア・シンガポール国際交流体験ツアー団員
- ・編集・発行 千代田区地域振興部国際平和・男女平等人權課
〒102-8688 千代田区九段南 1-2-1
☎ 03-3264-2111（代表）



2025.12.8-14

